

# 東方全人録

ツーと言えばカーな私

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

色々と混ぜてみた結果お蔵入りになったカオスな作品。

ちなみにキャラはどんどん追加予定！（募集中）

※完全新参の方たちへの注意

この小説は他の作者の皆様から活動報告で頂いたキャラクターや、自分の主人公達を適当にごちゃ混ぜして東方キャラたちと絡ませる日常系小説です。舞台が東方だけで後はオリジナル展開が続くギャグコメディだと思つて下さい。

閲覧される場合『本編』からの閲覧をお勧めします。

※※本当になんでも許せる方向けです。読んで不快になる場合があります。そう  
なった場合、即座にブラウザバックして下さい。

# 目次

## 転生篇

転生『ミックス』 1

転生『ドラゴンボール最強は誰か?』

6

転生『俺(ルミア)とお前どっちが強い

かな?』悪笑 11

クリスマス企画

クリスマス企画だよ!全員集合!!コラ

ボもあるよ! 招集編① 19

クリスマス企画だよ!全員集合!!コラ

ボもあるよ! 招集編② 30

クリスマス企画だよ!!全員集合!コラ

ボもあるよ! 招集編③ 40

クリスマス企画だよ!全員集合!!コラ

ボもあるよ! 招集編④ 55

クリスマス企画だよ!全員集合!!設定

集① 62

クリスマス企画だよ!全員集合!!設定

集② 83

やっと開催されたよ!取り敢えず楽し

むだけだよ!クリスマス会!① 88

やつtt(ry「タイトル長えんだよ」

by土方「さっさと始めるぞ」byルミア

② 96

クリスマス(ryねえこれ何の企画で

もないよね？

107

本編

本編？

136

本編開始イイ!!

142

落ちてった4人の場合

165

博麗神社に駆り出された奴の場合

172

狂ったやつの場合

177

185 迢ゆ ▲ 纏 溢 d 纏、 纏 ヲ 焔 工 蛭

2

狂ってたやつの場合 蛭・縲？ ▲ 纏ア 縲 贖

クサ 莠 算？ 纏 纏 励 〳 莠 九 纏 ヲ 縲

205



## 転生篇

### 転生『ミックス』

気がつけば俺は見知らぬところにいた。

そして後ろを向けば知らない2人。

今までであったこともない人いきなり会ったら本来驚くものだが、この時は何故か冷静だった。

「誰？」

初対面の人にこの態度とはいい度胸じゃないか。

「待て、一回話そう、あんたらは何でここにいるか知ってるか？」

「知る訳ないだろう」

「知ってる訳ないでしょ」

「デスよね。」

「こういう展開は……」

「転生だ！」

「転生…それは何か生まれ変わり異世界に行く現象…実際死なないといけないから実践

したものはいいし、余りにも非科学的な事なので実際ラノベとかアニメとかの二次元で起こる現象なのだが…」

「いったい誰に説明してるんだ？まあ、確かにその現象が起こっているな」

「じゃあ神様とかいるんだろ？」

「それだ！」

「え？何？何？」

「神様だよ！神様！絶対俺達に転生しろだの何だの言ってくる神様！」

「そいつが一向に現れねえのはおかしいってこったな」

「ああ…」

『《いやさつきからいるだけど？》』

「く（・・？）」

「誰だこの一般的なイケメンは潰してやろうか」

「いやロリだろ」

「え、俺にはキモオタにしか見えない」

「「「??」」」

《「「それぞれの神様の印象で姿を見せてんのさ」」》

「ああ、なるほどね」



「俺達のイメージが反映するようにされてんのか」

「何それどういう原理？」

「【いいからいいから】」

「で？俺達は一体どうなんだよ？」

「本当に転生するのか？」

「《そこまで分かっていたんだね》」

「【『ま、言ってしまったえば君達は俺（私）（我）の実験&amp;amp;楽しみになつてもらおう』」

「…本来転生は神様の失敗とか娯楽とかの目的の為や魂の色を見てみるものなんだが…  
お前は娯楽を一部の目的とし、魂のそれを選ばずにただの実験と言った」

「一体何を実験させようとしてるんだ？」

「【《それは…：…おっと面倒くさい事にもう時間だ》」

「え？制限時間あるの!？」

「それは聞いていない!!」

「ラノベ展開にも無かった展開!!」

「一体どうなんだ!？」

「《『ま、言ってしまったえば君達の推しキャラの能力とかをあげるって話、あ、容姿真似たい  
なら言つてん』》」

「お願いします」

《『おいおい早いな…ん？君はいいのかな？』》

「ああ、どうせ俺の場合は外国人の様になっちまうからな。それに能力だけでも十分だろ」

【『ふーん』】

「んあ！」

「『え？』」

「…ふああ…寝たなあ…」

「ずっと寝てたの!？」

「ていうか全然気づかなかった!!」

「え!?! 貴方達誰ですか!？」

「しかも女性!?!」

「え? え?」

【『『じゃバイ』』】

「『クソガミテメエ!!!!』」

「いきなりは無しだろ!!」

「ぎやあああああ  
!!!!  
」

## 転生『ドラゴンボール最強は誰か?』

「……!おい!恒星!恒星!」

「ん?何?つてここどこ!?」

「知るか!おい!南!と錦も起きろ!」

「うるつせえ!!」ドゴツ!!

「ぶっふっ…」

「何いきなり長男をダウンさせてるんだよ…双子として生まれたけど…」

「ふあーあ!知るかよ…」

「起こして来たあいつが悪い」

「…兄としての威厳が最近なくなっているような気がする…」

「「ねえよ」」

「酷いよこいつら」

「そんで?ここはいつたい何処なんだ?」

「多分俺たちを誘拐した犯人の家…じゃないのか?」

「俺たちを誘拐?誰得だよ」

「親も親戚も知人も全員他界してしまっただからなあ…」

「言うな!4人で頑張って暮らしてることがバレルだろ!」

「お前のせいでバレたよ!馬鹿兄貴!」

「え!そうなの!」

「……………放っておこうか」

「そうしよう」

「いや駄目!」

『《(もういいかい?)》』

「…誰だこの髭(足)(腕)(顎)長いおっさんは」

《《『ハア』反応に困るねこりや…ま、あんた達4人兄弟に見えている姿がそれぞれ違う

んだよ》》

「へえ」

「で?」

「それが?」

「……で？」

「『《君たちは本当に反応に困るね》』』

「で？ あんた、いきなり現れて何だ？」

《いやね君達には転生してもらうんだけど…東方に》

「『『東方？』』』

（『知らなかったのかい？』）

俺たちは無言で首をただ頷かせた。

「『『東方っていうのは……（中略）……っていう世界、ま、そこに君達はお望みの力を手に入れ容姿を手に入れ、ただ生活するだけ、あ、他にも君達転みたい生な人達者が来るからね、もう既に4人行っている』』』

「もういるのかあー！」

「じゃもうこれは…」

「『『ドラゴンボールしかないよなあ！』』』

何しろドラゴンボール大好きっ子の兄弟、ドラゴンボールを見ることに生き甲斐を感じているほどだった。

「俺ブローリーー！」

「最近の映画ね！まだ放映前だけど予告だけで鳥肌が立ったわー！」

「俺はフリーザかなあ」

「最初の頃からいるドラゴンボールと言えばかめはめ波、のような感じのフリーザ様だもんなあ……」

「俺（長男（次男））はあ……GT時空だよなあ（超時空だよなあ）!!」

「……は？」

「弟よ、そこはGT時空だろ？」

「いやいや兄さん、神だぜ？身勝手の極意なんてのもあるんだぜ？」

「スーパースーパーサイヤ人4フルパワーもそんな感じだろ？」

「神の奥義舐めんなよクソ兄貴」

「お前こそサイヤ人の究極形態をなめんじゃねえ」

互いにピリピリとした空気が立ち込め合う。というかこんなどうでもいい喧嘩に巻き込まれた全神王と三男と四男は可哀想である。あ、いやでも全神王の場合選んでしまったのがいけない。

「弟達もゴルドンフリーザとか映画の方のブロリーを選んだってことだろ？なら俺達超時空の方が分があるじゃねえか」

「いや次男よ俺はどちらかという、IFブロリーで4や5の方が好み」

「……」

「これで五分五分だな！」

「いやまだだ！まだ終わらんよ!!」

「いやもうZの方は？」

「あれは神作すぎてドラゴンボールの第二の原点だから」

「あ、そう」

【《《もういい？》》】

「待て、まだ決まって…」

しかし運命というのは残酷で…

「くそっタレーーーー!!!」  
「ヒュー……………」

【《《じゃ頑張つてね》》!】

もうタイムリミットが近かったため

落ちて行きましたとき。ちゃんちゃん☆



転生『俺（ルミア）とお前どっちが強いかな?』悪笑

「また、ここに…」

《『なーんだ君か、せっかくやけに強い奴が来たと思ったのに』》

「全神王か、大神官様は?それと何故ここに?」

『『ストライキだよストライキ、まあ息抜き?とも言う、で?第1〜12宇宙を管理の補佐をやっていたよな?どうだ?』』

何百という数の声が重なり合いとても1人の声とは思えないが、ルミアという神はこれに慣れている。

何故なら、ここはルミア自身の転生の間、彼は幾度と無く死に、運命をループしているのでよくここに来る。

そして、ルミアという元は人間だった幻想の存在は全神王に気に入られて、全神王はここに来るのでよく合っている。ちなみに、全ての時間軸、虚無空間、異次元、異世界、多重結界内、宇宙を統べているのが全神王である。

ルミアは全世界の神だ。神位はかなり上に属する。というか大神官を様付けして全神王を様付けしないのは彼の慣れだ。

「んー、ドラゴンボールを主とした宇宙なのでそこまで苦勞はしませんね、全王様も手伝ってくれるので、ああ、勿論、他の世界も管理してますよ」

「《でも、また死んだんでしょ？お前のその悩みは僕だつたら簡単に消せるのに》」

「それは、いいです、貴方の力だけは絶対に借りませんから」

「〔あつそ、じゃ、次はちよつと、コイツと一緒に新しく作つた世界に行つてくれないか？〕」

「？誰です？」

「ぱちつと指をならすと其処には、真選組の鬼の副長と呼ばれる土方十四郎がいた。

「ちよ!?またお前か全神王おお!!」

しかし、彼はただの転生者である。特別な…

一回ルミアの能力とその十四郎の能力を見てもらおう。この2人ははつきり言つてチートである。

ルミア

・全てを司る能力

・体力が無限に近くなる能力

種族 神

役職 均衡を保つ者  
全世界の神

十四郎

・無限成長

・不老不死

・夜兔の傘（超改造、超強化）

・全ての力を瞬時にマスターする

・完全記憶能力

・不可能を可能にする能力

・可能を不可能にする能力

・限界という概念をなくす能力

・限界そのものをなくす能力

・想像した事が叶う能力

・能力作成能力

・暴走しない能力

・支配無効

・デバフ無効

・結果を見て操作する能力



・絶対何があろうと魂や身体が消されてもケロっとしている身魂

・天候を操る能力

・天災を操る能力

・完全なる破壊の力

・完璧なる消滅の力

・完璧なる破滅の力

・感情操作

・記憶操作

・嘘か真か知る能力

・病原体を操る能力

・絶対封印能力

・火を司る能力

・水を司る能力

・雷を司る能力

・木を司る能力

・地を司る能力

・気体を司る能力

- ・闇を司る能力
- ・光を司る能力
- ・魔を司る能力
- ・妖を司る能力
- ・神を司る能力
- ・原子を司る能力
- ・超越
- ・能力無効デバフを無効にする能力
- ・ダメージを他人に移し替える能力
- ・自分で進化を作る能力
- ・完全無欠の称号
- ・全てが無能になる空間作成
- ・絶対に破壊されない空間作成
- ・いるだけで苦痛を与える空間作成
- ・いるだけで死に、消える空間作成
- ・最高次元多重結界空間作成
- ・完全再現能力

・最強の剣術

・絶対に掠れも外れもしない攻撃

・オリ主補正

・シリアスという概念破棄

・???スイツチ

・全てを気絶・威圧させる殺気と威圧感

・覚醒を何度もする能力

・他人の潜在能力全開放

・自分の潜在能力全開放

・潜在能力無限

・友がいる程力が跳ね上がる能力

・ネオアームサイクロンジェットアームストロング砲

e t c ……

種族 全ての強種族を120%配合した???種族

役職 転生者

他にもまだ、土方の語彙力のない能力は沢山あるが、引つくるめて、言えばルミアも上の通りのようなものだ。

「何だコイツは？」

「ん？あ、お前はアイツのどこ…」

『「はいはい、2人とも落ち着いて、ルミア、彼が俺の次に偉い神が、転生させた、転生者、まだ本編では本名明かされてないから、十四郎と呼んであげてね。ま、今回は本当にただの実験だからさ、楽しんでおいでよ！』」

そして、一方的な会話が終わった後に、直ぐに穴が出来て…。

「また、落ちるのかヨオオ!!」

「浮遊出来ねえ!？」

《「へま、今回は、十四郎とルミアには楽しい結果になるかもね。じゃファイト!」》



## クリスマス企画

クリスマス企画だよ!全員集合!!コラボもあるよ! 招

### 集編①

ジングルベル♪ジングルベル♪鈴が鳴r……

ドガアアア!!

「全神王おおおおお!!」

『お!土方!ちよつと前ぶり!』↑普通の声

「何故だ!何故もうクリスマスの準備をしている!」(現在編集23日)

『(無視するなよ) いや、当たり前でしょ、今やんなきゃダメでしょ? 早よコラボして蓮ちゃんとルミアの物語進めて、他の奴らとやんねえと俺色んな所から叩かれるぜ? それにルミアのとこの作者さんはお前と戦わせてみたいと思し召しだ、後であったとき戦ってみたらどうだ? お前とルミアで絶対空間作成あるだろ、あれ使え』

「おいおい! トントン拍子で話を進めるな! こっちは今お前の頼みで全宇宙の中から主人公達を探し回ってんだぞ?! お前もクリスマスの準備をしてないで手伝ってくれよ!

「というかお前一瞬で飾りとか付けられるだろ!？」

『おいおい、この全宇宙の最高神様に随分な物言いだな、だけどまあいいか、あ、作者は遅れてくるってよ』

「アイツが俺たち招集したんだろうが!」

『確か、主人公は遅れて登場してくるんなんだぜ?とか言いながら、学校の方走ってつたよ』

「リアルの方の部活かよ!」

「まあ、そうカッコするなって、さ、主人公達アイツらを探しに全宇宙を股にかけて! Lets

Go!」

まず一つ目

原作 この素晴らしい世界に祝福を!

タイトル『確かに剣を転生特典に頼んだが俺自身がなるとは聞いてない』by土方(転生者)

この作品を知らない人のために説明しよう!

この物語の主人公の名は刀神 踏影。彼は、アクアという駄女神のお陰で剣に転生してしまい、何故かは知らないが世界最強の剣という異名を持つ!

そして、この『この素晴らしい世界に祝福を!』の本当の主人公に拾われそれとして生きる物語である!

駄女神により剣生した刀神は今日も平和な時を……

「オラア!道場破りじゃゴラアア!!」バギ

過ごしていなかった…。

そんな馬鹿でかい声を発生しながらやって来たのは土方。

「ギヤアアア!!?」

「お!あつたあつた!ん?でも一応人でもあるから、いた、でもいいのか?」

そんなどうでもいいことを言いながら刀に歩み寄る。

「いったい誰だよ!」

当然、刀もとい刀神は何事か驚きの声?をあげる。

「えつとだな、まず説明すると、カクカクシカジカコンテスト最優秀賞!という訳だ」

色々と省略されたが、要はクリスマス企画なんで全員集合という事だ。

「ああ…把握」

それで良く把握できたかは驚きである。

「にしても随分と投稿されてないな、お前の物語、最終投稿日7月24日じゃん」↑6月24日

「お前よりはマシだろ！」

チャキ

「……それは言わねえ約束だろ？」

なんとも悍ましいオーラと声を発して、その殺気は人をも殺せそうな勢いであった。そんな気を当てられたら、元々達人の域にいる刀神でも恐怖した。

「あ、はい……」

「ともかく！俺と一緒に来て貰うからな」

「クリスマス企画か……だが、こんな連れ出し方でいいのか？土方？」

「いいんじゃないか？時間がねえんだから、クリスマス企画じゃ無くなる事を阻止しねえと」

「メタいな」

「それが企画って奴だ！それに俺たちは、世界観崩壊させまくって行く感じだから！」

「だから、この時代に合いそうにない服装なんだな……」

「まあな、一応江戸だし、じゃあ移動するぞ」ピシユイン！

嵐の前の静けさならぬ嵐の後の静けさがそこにあつた。

また違う世界では、

原作 この素晴らしい世界に祝福を!

タイトル 『プロリーMAD×このすば』 by 全神王

また説明しよう!この物語は!兎に角プロリーMADを知ろう!

そして脳内で彼らのボイスと特徴を覚えて読んだ方が混乱しないので!プロリーMADを知っておこう!

「ちわーっす!」ドガアアアア!

「何ダア?」

「何ごとダア→!?!」

「てめえええ!!オラの飯をおお!!死ねえええ!!波アア!!」

「ふっ、クズに育った別次元の悟空よ…貴様は我に勝てねえよ!終焉の…」  
ゴッド…

「落ちツケエエ!!」ピロロロ

「つまりは私たちはその企画に参加しろと？」

「そういうことだ」

「くだらん！」

「え？ いいの？」

「そんな、くだらんモノに参加している暇があるなら働け！」

「お前までもに冒険者の仕事をしていないそうだが？」

「何っ!？」

「それに本当にいいのかなあ…一応参加する人達の写真あんだけど…」ピラピラ

「ふおお！こ、これは！まさか！」

「デーーン！」

そこには、まあ…正直言うのはなんだが…その写真の人はみんな大好き安心院さんの  
ロリ姿だった。

これは安心院さんと、とある賭けに勝った全神王が撮った写真だ。

「ロリキターーーー!!!」

「出たよ、伝説のスーパーロリコンのベジータ」

「ケツ、情けねえ野郎だ…サイヤ人の面汚しめ!」

「黙れええ!!行つてやる!そのパーティ会場とやらに連れて行け!」

「オラはおめえを絶対許さn…」

「あ、宇宙で一番美味しい料理が沢山あるぜ?」

流石クス、変わり身が早い。

「早く連れてイケエ!!」

「オイコラ」

「あ、ブロリーも勿論参加だよ?何せブロリーMADなんて思いつきり名前にあるんだから、それと君にも沢山の飯もあげるし、ベジータのノルマも達成出来る筈だ」

「ダニイ!」

「綺麗なお姉さんとも絡み合うことがあるかもね?パラガスさんよお」

「遂に来た…俺の時代が…」

その気持ち悪い笑は何ダア?

「よお!ピツコロ、よく来たなあ…」

「貴様らの話を聞いてた、俺もそのクリスマス企画とやらに参加させてもらおうZE」

「OK、じゃあ俺の方に捕まって」

「オラの瞬間移動をパクリやがったな!このクス野郎!」

「あ、あ？」

「オラが言ったんじゃねえ！プロリーだあ！」

「は？カカロット……殺してやるぞ！」

「ヤベツ!?逃げろ」ガシッ

「逃げられるとでも思ってたのか？」

「後ろをよく見てみる！」

「何だあ……？」

「今だ！波アアアア!!」

ドガアアアアン!!

煙が上がり、そんないつもの茶番の光景のように見知ったベジータとパラガスとピッコロは、この後の出来事を簡単に予想する。それは至極簡単な事で……

煙が晴れた後に出て来たのは無傷のプロリーだった。

「やあ☆」

「ちよつと急ぎの用事が出来ちまったんで……」

「お前等は落ち着くということを知らんのか!？」



その場は全神王の一喝により落ち着いた。

「誰か一人忘れていませんかっつてんだ!」

.....

しかし、もう誰も居なかった…。

その後、

原作 僕のヒーローアカデミア

タイトル 『感情と神経を犠牲に…』 byルミア

この物語は奏 こころという東方キャラと性格も能力も容姿も酷似しているキャラの兄の奏 心浄がとある事件が引き金に個性に目覚め、ヒーローを目指すというストーリーだ!。

(動けないな…)

「やあ、心淨くん」

(ん？誰だ？)

「随分と落ち着いてるな、まあ感情を失われているのだから当然か、まあ聞けよ、俺はルミア、お前を迎えに来た」

(あの世にか？)

「いや、パーティーだ」

(パーティーだと？)

「今日は丁度クリスマスだ、そしてお前は選ばれた、だから来い」

(強引だな)

その病室から人気は居なくなつた。

原作 この素晴らしい世界に祝福を！

タイトル 『転生は普通、輪廻転生だよな？何で穢土転生してんの？』 by 土方

これは、ただ不死性と界王拳を得た少年の転生冒険記…という感じなのだが…全然普

通に行かない物語である!

「……」

最近、ゆんゆんと触れ合えて居ないので、ストレスが溜まっている無編井加奈シスコン一名はベッドにくるまって居た。

「おい、どうした、そんなベッドで引きこもって」

「は!?!お前誰だ!?!」

「俺は土方だ、何、お前と一緒にの転生者だよ」

「あ、何だ、転生者か……ん?待てよ!?!何で転生者がこの家にいるんだ!?!」

「んな事はどうでも良いんだよ!さっさと行くからな!」

「はあ!?!」

ピシユイン

そしてまた一人…。

クリスマス企画の会場へと送られた…。

## クリスマス企画だよ！全員集合！！コラボもあるよ！招集 編②

※前回の続きから

原作 この素晴らしい世界に祝福を！

タイトル 『この素晴らしい魔王軍幹部にも安らぎを？』 by 全神王

これは……ただ『鬼神王』の力を得てから、魔王軍幹部になってしまった転生者が商業とか冒険をまたLETS！enjoy！したいお話である。

「ああ〜書類仕事ダリイ……つたく、もう何で俺が魔王軍の書類仕事を任されてんだ？……ブラック企業だろ……」

『まあ、そんなの入ったアンタが悪いんだけどね』

「仕方ねえだろ……魔王に土下座されちゃ断るモノも断れ……誰だ!？」

『ありきたりの反応だね、ノリツツコミ系芸能人の足元にも及ばないし、よくアニメキャラが驚くようなセリフだ』

「……お前、凄えメタイ事言ってるな……」

『おいおい、急に冷めるなよ、つまらないだろう?』

「お前の都合なんて知るかよ!」

『そうかい、じゃ、行くよ』

「は?何処n……」

こうして、剛は転移した、その転移している間に色々とクリスマス企画というメタい事などを頭に吹き込まれたが、其処は後々、大人の事情という事で忘れてもらえるのでもいいだろう。

また、別の宇宙の時空間では

原作 僕のヒーローアカデミア

タイトル 『俺の個性は『巨人化』』 byルミア

ただただ…悲しい運命を持つ一人の<sup>少年</sup>巨人が…ヒーローになるお話でさあ…旦那…

「お前は一体何を目指す?」

「そんなの今の所ない、それに何だ?お前も俺の<sup>呪い</sup>個性が狙いか?また、平穩を乱すのか?」

「……さあ、だがまあ、これだけなら言える……ガキが悲劇の主人公演技してんじゃねえよ……!!!」

「っ!!」

「とにかく、お前を集めるように俺は言われてんだ、早く行くぞ」

「待て！お前は一体俺を何処に……!?!」

また、一人、その時間軸から居なくなつた。いや、招集された。

別の宇宙では…

原作 僕のヒーローアカデミア

タイトル 『夜兎最強の男がヒーローを目指すようですよ?』 by 土方

まあ…何とういうか…銀魂の神威が転生し、ヒーローを出久達A組と過ごす話である！  
！闇落ちルートもあるかもよ？

「あれ？何でアンタがここにいるんだい？鬼の副長さん？」

（まあ、そうだな、本来いるはずのない人間が声かけて家に来たんだからその反応も当

たり前か)

「ねえ、答えてよ?殺しちゃうぞ☆」

「冗談はよせ、俺はまず真選組の鬼の副長、土方十四郎じゃない名前は一緒だけどな」

「へえ、姿形は似てんのに?」

「ただ姿変えてるだけだ!それに!本人より俺バージョンアップしてるから!全然冴えない男とかじゃないから!」

「そこまで言つてないんだけど」

「あ、はい…じゃあ、お前を送る役になってるから…送るぞ」

「へえー何処に?」

「クリスマスのパーティの会場だ」

ピシユイン!

また一人、会場と言う名の東方の世界へ送られた…

現在 クリスマス会場地は…

神威「お！ここかあ…しかも何か知らないけど、悟空がいるじゃん」

剛「つたく…あの作者モドキめ…」

???「あ、また来た」「あのごめん、もう離してくれない？」

神威「ん？アンタは…うちの作者の所の所のモンじゃないな？」

???「え？分かっちゃいます？」「ねえ、聴いてる？」

剛「まあ、うちの作者つてシヨタ系主人公作つてないもんな」

心浄「お前達も来たか」

神威「お、アンタは…誰だ？」

心浄「↑名前表記があるだろ、心浄だ、因みにそのシヨタ系主人公の彼は、コラボ

相手の蓮くんさんだ」

蓮「いや、俺普通に蓮ですよ！蓮くんのくん 要りませんからね？」

ベジータ「そんな事どうでもいい！ロリーは何処ダアア!!」

悟空「うるせえっ！ぶっ殺すぞお！」

神威「へえ、俺が知ってるアンタ達とは随分と違うなあ、ねえ…戦わない？」

蓮（にしても、この世界の悟空達は一体どうなってるんだ？ベジータがロリコンだし、あの宇宙の大英雄の悟空が凄いドクズ野郎だったし…パラガスが変態で遊戯王の増殖で増えてるし…ブロリーは…うん…全っ然破壊の悪魔じゃないし…俺が知ってる知識と



かけ離れてるな……頭が痛い……)

刀神「誰か、俺の話を聞けええ!!」

悟空「うるせえ!!チクシヨオオオ!!あの野郎神王飯がたんまりあるって言ったから、ここに来たつてのによお!!許させねえ……じわじわと罫り殺しにしてやる!!」

ベジータ「ふおおおわ!」

岩盤『おらよ』ヒョコ

ドカーン!!

ノルマ達成!

神威「お、飛んだ飛んだ」

ベジータ「貴様アア!!よくも俺を蹴りやがったなあ!!神威!ぶつ殺して……」

ブルリー「落ち着けや」ドカツ!

ベジータ「ふおおおわ!」ドゴーン!

岩盤衝突二回目!

既にカオスになっていた。

原作 僕のヒーローアカデミア

タイトル 『俺は最悪であり最恐の寄生被害者だ』 by 全神王

この作品は、皆さん知ってると思うが、ヴェノム、またはシンビオートに寄生された、個性『悲しみ哀しみ』を持つ青年が、ヴィラン連合に入り、出久達の敵になるという、ストーリーだ。

『さて、この世界の子は他と比べて、随分とお人好しだね〜この世界で言う敵ヴィランでしかもヴィラン連合なのに』

『今日の仕事は何だろうか：俺を拾ってくれた事はありがたいけど、休みが欲しいなあ』  
勿論周りに人は居ない、側から見たら一人で何喋ってるんだと思われるものだが、自身の体の中にシンビオートがおり、それに話しかけているので問題ない。

〔そう言うな相棒〕

『たわいない会話をしている所悪いけど連れてって貰うよ!!』

「!?」「何だ!？」

すぐに口を塞がれ、直ぐにシンビオートを纏わせるが全く動かない。

「ん、ー!!?ん、ー!!?」

『悪いいな、俺はとある事でお前を連れて行かなきゃいけないんだ、お前の場合反抗してくるだろ?だから強引に連れて行くぜ?』

何重という声の重なりがシンビオートの耳に響き、力が弱まった。

『そんなに、警戒しなくても結構だよ?何せただのクリスマスパーティーなのだから』  
「誰が信じられ…!!」

しかし、頭に流れてきたのはその情報についてだった。

また、過去の物語では……………

原作 Under tale

タイトル 『第三のルート』 byルミア

これは…ただのスケルトン兄弟の母親が…一人の少年の破壊と殺戮を止める少しのひと時を記したものである。

「結局…………彼の決意には負けたまま…………か…」

結局、何度もやっても、同じ結果だった…。

それが繰り返されて、終わったただけの話…他の時間軸では…もつと平和に…………暮らしているのかしら?

「そうとは限らねえぜ」

「誰…かし…………ら?」

「消えかかっているな、お前のソウル…：やっぱり、間に合わなかったか…：仕方ねえよな…：これが最終結末だ…：Pルート<sup>①</sup>の時間軸だったなら…：行けたのか？ そうすれば…：いや…：」

「何…：の…：事…：？」

「お前のソウル、俺が助けてやるよ、人の魂を司るなんて簡単な事だ」

手をかざすと、そのソウルは元に戻った。

こんな事は初めてだった、誰だつて成し得ることのない、ソウルの復元、それを平然と目の前の男はやつてのけた。

「さつ、行くぞパーティ会場へ、そろそろ終わるんだからな」

その時間軸に、shu<sup>シュ</sup>py<sup>ピイ</sup>という魔物は居なくなった。

そして、また土方が担当した世界

原作 ドラゴンボール

タイトル 『もしもドラゴンボールと東方が混ざって居たら？』 by 土方

それは…龍球と幻想が入り混じりあった、一つの世界である。

東方のキャラ達が元々、ドラゴンボールの世界におり、その世界で生活しているの…悟空とオリ主が巻き込みながら行く摩訶不思議な大冒険の物語だ。

「ああくん、っん、っ!邪魔すんぞ〜」

何故、咳ゴミをしたのかは謎である。

「誰だお前は」

勿論、家に入られた悟星はそんな反応をする。まあ、亀仙人の家だが。

「いやな、お前をパーティーに呼べと言われたからな」

「パーティー?どんなパーティーだ?」

「クリスマスのだよ」

「は?何を言っている?クリスマス?今は夏……」

「まあ、取り敢えず付いて来い」

「あ、おい!」

ピシユイン!

そしてまた一人、また会場に送られた。

# クリスマス企画だよ!! 全員集合! コラボもあるよ! 招集 編③

※前回の続きです

原作 ハイスクールDXD

タイトル 『柱間アア!!とマダラアア!!の魂を宿した男の転生日誌』byルミア

これは、ある二人…というよりも上に書いてある通りNARUTOの初代火影 千手柱間とうちはマダラが一人の男に宿り、その物語を日記に記していく、という物語だ。

「さて、今日も日記を書くか…でも最近、特に目立った出来事がない…」

「なら、俺がお前の事件を作ってやろう」

「あんた一体誰だ!?! いつこの家に入ってきた!?! 不法侵入って事で訴えるぞ!」

「いや、別にそんな不法侵入とかじゃないからな、ちゃんと許可貰ってるから」

「誰の!?!」

「全の神を統べる王王から」

「誰だよ!」

「取り敢えず、まあ…一緒に来い、段々俺もキャラ崩壊が起きそうなんだ…早くしねえと…」

「そんな理由知るかー!」

シユン

また、一人…招集されえと(いい加減、言葉を変えよう)

原作 この素晴らしい世界に祝福を!

タイトル 『元が駄目だったので神やります』 by 全神王

ただ、魔王を倒した奴が、今までの自分の物語を失敗作だ…という事で、神格化してやり直す話。

しかし、やり直すと言っても、転生させる神としての新たな神生。

「そろそろ…か」

「いよーっす!待ってたー?」

「いえ、全然待ってませんよ全神王様」

「神関係の主人公は話が早くて助かるねえ、じゃ、行こっか」

「はい」

シユン

そろそろ、この言葉を考えるのが辛k（殴

※ここに一つ、

原作 『この素晴らしい世界に祝福を！』

タイトル 『もしもカズマさんがメイドを雇ってそれが完全に瀟洒なメイド長（仮）  
だったら』

が入るんですが、実は既に全神王に招集されて会場の準備しているので飛ばしました。

そろそろ、ラストスパート！

土方「段々、俺たちも疲れてきたんだが？ 3話連続で働いて、そろそろ休暇が欲スイ  
……」

ルミア「俺との決闘があるんだぞ？ そんなんで大丈夫か？」



土方「大丈夫だ…問題ない」

作者「よし、じゃ、やれ」

土方「…覚えてろよ」

作者「安心しろ、俺の記憶能力は完全記憶能力とは真逆の概念だ」

土方「……………」

原作 ONE PIECE

タイトル 『メリオダス in ONE PIECE』 by ルミア

メリオダスの力の容姿を転生特典として、手に入れた転生者がルフィと共に、海賊王を目指し！ワンピースを手に入れる物語だ！

「んー、今日は良い獲物が釣れなかったなあ…」

「そうか、ならお前を食料がたんまりある所に招待してやろう」

「!? (何だコイツ!?!俺の見聞色に引つかからなかった!?!)」

「悪いが、見聞色の覇気程度には、俺は見えない、そら、さっさと行くぞ」ヒョイ

「待つ、待てよ！掴むな！持ち上げるな！」

シユン!

後……………4人……………

原作 転生したらスライムだった件

タイトル 『転生したらサイヤ人だった件』 by土方

プロリーの映画を観に行った後、暴走車と衝突し、息絶えたら、『転生したらスライムだった件』に転生して、更には、サイヤ人になっていた!

しかも真なる魔王になっちまった…という、波乱な人生を迎える主人公の生きてく生き様を記した物語だ。

「スプー……………スプー……………zzz……………zzz」

「今までの中でコイツだけぞ…眠ってんの…いいか、連れてっちまおう」

(そういえば、コイツ、この世界じゃ『九柱魔王』の1人だったな…。まおうと魔王でダジャレみたいに思われて、寒いとか、誤解されなきゃ良いけど……………)

ピシユイン!

(今回は楽だったなあ……………)

後……………

## 3人

一回、土方とルミアも全神王から招集受けたので、理の部屋という所に集合。

全神王『やつと、俺たちの作者が作った子が集まったわー』主人公

土方「マジで長かった……つたく、投稿遅いからって無理に作るとヤケに短くて雑になるのによく作ったもんだな、今回の企画……」

ルミア「一応、俺もコラボ相手なのだがな……」

全神王『いいジャマイカ、一応リアルで友達なんだし』

土方・ルミア「「おいおいおい、メタい」」

全神王【《(「じゃ、そろそろ声も戻していこうか)》】

土方「相つ変わらず、何千の声が頭に響くのに慣れない……」

ルミア「俺は慣れたが……」

全神王『はあ……まあ、分かったよ、元に戻せばいいんでしょ、戻せば、じゃ、2人には罰ゲームね』

土方「お前が勝手に実行したんだろ!？」

ルミア「諦めろ、土方」

土方「…まあ、そうだな」

ルミア「全てを司る能力程度の能力を使ったとしてもコイツには無意味だしな…」

土方「正直、勝てる気がしないというか…するとというか…」

全神王『おいおい! そんなに褒めないでくれよw w』

土方「褒めてねえよ! ……で? 罰ゲームってのは?」

全神王『いやね! ここに、コラボ相手連れてきてくれない?』

土方・ルミア「そんな簡単なことでもいいのか?」

土方「あ、ハモった」

ルミア「どうでもいい」

全神王『まあ…1人は厄介だろうねえ…実際、ウチで勝てるの、アタシでしょ? 可能性は土方、それに神威、あと太刀打ちできるのは、仁(転生したらサイヤ人だった件の主人公)、まあ、あその他の柱間とマダラの魂宿ったあの子も、術の発動前に能力で狂わされて発動できないだろうし、あとメリオダス辺りが太刀打ち可能だね、一応勝てる可能性あるけど…ま、低いでしょうねえ…何せ法則つてもんがまるで通じ無いんだもの、ま、本気出さないなら、90%ぐらいの確率で勝てるね』

土方「待て待て、俺が全神王お前を除いて可能性で負ける確率があるだと?それは聞き捨てならん」

ルミア「まあ、『ありとあらゆるモノを狂わせる程度の能力』俺からいつて仕舞えば、所詮、能力は程度でしか無い、そんな奴に土方が負けるのか?」

土方「どつからその情報手に入れた、いやでもお前も『全てを司る程度の能力』だろ」  
ルミア「いや、いつでも能力は覚醒できるぞ、ただ、抑えているだけだ」

土方「能力って覚醒なのか?進化じゃなくて?」

全神王【冷たいこと言うね、君たち……それ、失礼だから辞めな?断罪するぜ?我自  
ら】

その時、どこかの宇宙の数多の数の惑星の生物が急に死滅した。

土方・ルミア（久し振りにコイツの殺気に当たったな……）

土方（相変わらず、コイツの殺気は宇宙を一つや二つくらい簡単に死滅させていきそうな勢いだな…）

全神王『私はあの神を気に入っているんだ、安心院さん並みにね、まあ…作者はクトゥルフ神話、あんまり知らないけど…』

土方（…おい、ルミア）

ルミア（何だ、全神王、一応言っておくが怒ってるぞ）

土方（分かっている。多分こんな嚴重過ぎる念話程度じゃ簡単に聞かれてんだろうけど、安心院と同格に気に入ってるって…それって最愛って事だよな？）

ルミア（最愛の妻だからな、安心院さんは全神王的）

全神王（そこまではイケないぜ？それ以上は俺のミステリアス風最強キャラが壊れるじゃ無いか）

土方（やっぱ聞かれてるよなあ…）

ルミア「さつき、1人はと言っていたが、2人目も居るんだよな？」

全神王『実際作品にはされてないけど、ウチの主人公たちでも簡単に倒せるね…言い方悪いけど』

土方「お前にも、そういう心があったんだな…」

全神王「酷いねえ：最近の僕の扱い、これじゃテンプレ作業だよ、切り替えてくんなきや読者が飽きるつてもんだぜ」

ルミア「そろそろ言うが、お前ら、他の作者から絶対叩かれるからな？さつきから強さ限定で話し合っているとはいえ、失礼にも程があるぞ？」

全神王「じゃあ、今のうちに謝罪会見でもしちやう？」

土方「舐めすぎだろ：軽いもんで行うモノじゃ無いぞ…」

全神王「つていうか待て、そろそろ、やばくなってきたんじゃないか？アタイ達の会話で随分尺が取れてるぞ？」

ルミア「尺っていうな、尺って」

土方「要するに、連れてくりやいいんだろ」

全神王「じゃあ場所、言うから行つてきてね、まず土方は『カーリシユ』さんのクト、ある意味、戦闘狂？だから気をつけてね☆で、場所は、第38宇宙 第9863番の裏世界線 タイプ幻想郷 世界物語分岐は7008個あるけど、第7番の所が正解、後は色々ズレてる。ルミアは蓮くん分かるだろ？そこの作者さんの所の、『去咲 旅人』

だから世界線は近いよ」

土方「相つ変わらず、そこだけは正確に教えるな」

ルミア「逆に俺は少し情報が少ないぞ…」

土方「だけどよ、作者さんが同じなら世界線は同じ番号だろ？ただ、世界分岐の数が違うだけだ、結構簡単な方だろ」

ルミア「まあ…そうだな、じゃ、後で」

土方「おう！」

原作 東方Project

タイトル 『東方英雄伝』 by 土方

『カリーシュ』様、手がける作品！是非見てみてね！



「……………来て早々感知してみたが…ここはウチの作者以上にクロスしてんなー、このまま俺がここに滞在したら、どう運命が変わるかね…にしても幻想入りする人って何かしらイケメンなのは何故だ?ま、いいか、クトを探しに行こう…」

と

思ったらもう来たのかよ」

何も無い所から現れるというのは、もうお約束と言うものだ。

何も無い所からクトは出てきた。

「ほむほむ。アンタがお迎えかい?」

「ああ、アンタのお迎えさんの土方だ、親しみを込めて土方さんと呼びなさい」

「どこぞの化け物安心院の真似かい?クツケケケケ…にしても土方にそっくりだねえ」

「そりやどうも、こちとら、無理やり転生させられてこんな姿になっちまったんだよ、まあ、元の姿にもなれるがな、今は強制的にこの姿だ」

「そんな事より!どう?バズーカー発イットク?イットク?」

「行つとく?の文字違えだろ!おい!待て!打つなよ!?!絶対に打つなよ!?!収集がつかなくなるからな!」(ネタの)

「ええー……しようがないなー……」

「おい待て、文末の『…』は何だ!?!」

「と思っていたのか!」ドカーン!

「だろうと思つたよ!というか、素直についてくる気なしか!」

「シヤラップ! さあ! 次行つてみよーか!!」

(ガチで厄介な奴じゃねえか!)

クリスマス会場では…

蓮(どんどんと送られてくるなー)

咲夜(転生者)「蓮さん」

蓮「あ、はい!」

転咲夜「後は食事の準備なので手伝っていただけませんか?」

蓮(いや、貴女も時を止められるでしょう? 何故俺が…?)

転咲夜「すいません、聞いていますか?」

蓮「あ、ああ!はい!わかりました!」

咲夜「それでは、私は先に行っています」

蓮(……俺の所の咲夜さんとは違って甘くないな……)

超え  
転咲夜(久し振りに小学生ぐらいの子と話した……少し若返った気がする) ↑300歳

原作 東方Project

タイトル 『死んでてシヨタにして幻想郷に居たんだが俺に救済はあるのか?』

『黒いサクマ/@@@?』が手がいている作品です!第一主人公運は既に居ますが、第二主人公も参加するため招集します!

byルミア

(名前は…去<sup>サリ</sup>咲<sup>サキ</sup> 旅<sup>タ</sup>人<sup>ヒト</sup> 能力『恐怖の霧を操る程度の能力』…か…あ、それにコイツ、妖夢の事好きなのか)

全神王から渡された簡潔に書かれている、旅人のプロフィール？を見ながら、目的地に向かう。

1分23秒後

「着いたか……ここはまだ平和だな…俺も転生し続けていたらここにいずれ生まれたの  
だろうか？」

「……………」スタスタスタスタ

(あれ？今のやつ、旅人じゃねえか？)

「なあ、おい」

「ん？何だ？」

「お前……」

クリスマス企画だよ!全員集合!!コラボもあるよ!招集

編④

1人、残された全神王は、作業に取り掛かる。

『前回にあと………○人とか有ったよね?あと——人、わっちが回収しに行くから宜しくねー』

※前回の続き

原作 東方Project

タイトル 『死んでてシヨタに転生して幻想郷に居たんだが俺に救済はあるのか?』

byルミア

「なあ、おい」

「ん？何だ？」

「お前、旅人か？」

「そうだが…なぜ俺の名前を知ってるんだ？」

「いや、ちよつとな、お前を呼びに行けって、とある方から言われてな…」

（…俺を誘拐するってのか？）

「へえー、それはどんな内容何だ？」

「クリスマス企画のパーティー」

「は？」

「だから、クリスマス企画のパーティー」

「は？」

「だk…」

「いや、もう理解してるわー！」

「何だ、じゃあ、さっさと行くぞ…強引で悪いが」

「ちよ!?!待てよ!?!」（若干キムタク風）

シュン！

※前回からの続きです

原作 東方Project

タイトル 『東方英雄伝』

急に戦闘?へと移り変わったクトと土方は対峙していた。

「俺とお前、どっちが先に狂うか…試してみようじゃねえか」

「クツケケケケ!!いいねえいいねえ…じゃあSAN値チェック始まるぜい!!」

「一刀流奥義!」

「お?お?早速必殺技?カックイーね!」

「零!!!」  
ラスト

光速など優に超える程の速度で切ったが、からぶった、性格には掠った。

「いきなりボス戦用の技じゃん!」

「今のを避けるかよ、能力で『絶対に掠りもしない外れない攻撃をする能力』つてのを  
持つてるだけどね…:あんだ…:能力を本当の意味で狂わせたのか?」

「そっちが、手加減してくれたんだルオ?じゃなかったら、とつくに当たってるし…:というか、あんたのお陰で空が本当の意味で切れたでせう。これ後始末どうしましょ」

上を見ながらそう呟くクト。確かに空は本当の意味で切れている。剣の軌道とかに言わせて真つ二つに雲が割れているでもなく。次元が割れているような感じである。

「どこかの不幸高校生かよ……それとな……さっきのお返しだ！この野郎！かつて江戸全体を壊滅的な被害に追い込んで焼土に変えた！伝説の禁断の武器になった！ネオアームサイクロンジェットアームストロング砲を受け！「なっげえわ!!」ごぶっ！」

見事に対 土方（バケモノ）用ドロップキックが決まり、土方はぶっ飛ぶ。

ぶっ飛ぶと書いているが実際には、そんな長くない。

「んー、にしても完成度タツケエなオイ……これがかつて、宇宙の戦争で星一つを消滅させたとというネオ（略）砲か………下ネタじゃねえか!!」

「あー！いつの間にお前操縦席乗っけ」

「お返しのまえにお返しでい！出前はちゃんと受け取りな！ネオ（略）砲！発射!!クーツケケケケケ!!」

「ちよ、待てy」（全然似てないキムタク風）

ドガアアアアン!!

その発射先の地面は数千m先まで抉れていた。当たり前である、完全に土方が改造してるんだから。

「おーおー、まともに受けたのにまだ立つかい？」



「ったりめえだ、というか今ので死んでたらチート能力者やってねえっての」

「そりやそうだね!クツケケケケケ!」

「嬉しくねえっての、まあ、いいや、茶番辞めてソロソロ行かねえと俺が怒られる…アイ

ツに…」

「急急急急急え!?!」

「急にどうした」

「もうちよい熱くなれよー!!」

「いや、でも尺つてもんがあるんでねー!無理なんだよー!」

「そこを何とかしろよー!」

「無理なんだよー!」

「えー、しょうがないなく…」

「開き直り、はっええなオイ」

「と思っていたのか!」ドガン!

「またかよ!!?」

何やかんやありまして、ちゃんと送られました。

……

タイトル

???

原作

『??』

by 全神王

『現実と幻想の境目の住人』様からの、応募！ありがとうございます!!

「……誰？」

『やあやあ、僕ドラえもん』（ガチの真似声）

「複製『スカーレットバズーカ』」

『んー、乗らないねー…』

「急に危ないじゃない（著作権的な意味で）それに簡単に避けないでほしいわね」

『ま、そこらへんは安心してくださいな、それと、スペカについて失礼。じゃあ、読書中

失礼だけど……』

「眠ってただけよ？何サンド○イツ○マンのネタやろうとしているの？」

『えー。仕方ない、くだらない事は置いといて、会場に送りますかー』

「強引ね、今度からは事前知らせてくれないかしら？」  
『分かりましたよ。それだけは約束しましょう!』

シュン!

# クリスマス企画だよ！全員集合！！設定集①

作品原作 この素晴らしい世界に祝福を！

本名 トウシン フミカゲ  
刀神 踏影

二つ名 『刀になった剣豪』『世界最強の神器』『修羅鬼神羅迅速刀』

能力 『憑依』『刀化』

簡単詳細

使い手によつては山を切れる、また多重能力者が使えば次元が切れる刀。

ただ、刀の使い手に本人が憑依した場合、大体の神に勝てる。

ただ、本人自身が退屈しているので、勝手に浮くことが多い。

将来の夢は『優しく使ってくれる人に使ってもらう（剣の腕が立つ人に限る）』

作品原作 この素晴らしい世界に祝福を！

本名プロリー

二つ名 『悪魔』『悪魔の兄』『破壊のサイヤ人』『プロMADの主人公』

能力 無し

## 詳細

本来の劇場版のブロリーとは違って、ブロリーMADという、ドラゴンボールが完全にギャグに走った方面でブロリーが主役のMADの主人公。インターネット上で流っている。

ベジータには良く岩盤先輩にぶつけている。

そして、みんなも一緒に：

デデーン☆

がお馴染み。そして絶対最強。

本名 孫 悟空 《カカロット》

二つ名 『クズロット』『ドクズ野郎』

能力 無し

簡単詳細

悟空が正義の方面から完璧に反射した様な性格のクズ。悟空の全てを装ったクズ。ただし、スーパーサイヤ人2までにしかなれない。ただ、腹が減ったから、という理由

で人を殺める事もしばしば。一時期はそれで世界を乗っ取ろうとした。

本名 ベジータ

二つ名 『ロリータ』『伝説のスーパーロリコン』『B I N N G O!!サイヤ人』

能力 無し

簡単詳細

ベジータがプライドを捨てて、ただのサイヤ人の面汚しになった。よくボケて、ロリを襲う。その度にブロリーに粛清のために岩盤をやられる。それと、動画のノルマとしても岩盤ノルマがある。また、スーパーサイヤ人1までしかなれない。

本名 パラガス

二つ名 『変態』『増殖の鬼』『オメガロイドパラガス』

能力 無し

簡単詳細

ただの変態。自分を増殖して、有り得ない数を出し敵を倒す。

一匹一匹は弱いが、塊すぎるとある意味最強で最狂。よく綺麗なおねえさんに自分の

股間を近づけてくる。

本名 孫 悟飯

二つ名 『優しさの塊』

能力 無し

簡単説明

幼少期の悟飯スーパーサイヤ人2（セル戦）までなれる。ただ、それは怒りの頂点まで達した場合。

強さはブロリーと互角。

大抵は優しすぎる優しさの塊。無理な時は『無理ですよお』という。

本名 ピッコロ

二つ名 『仙豆王』『許仙豆王おお!!』

能力 『仙豆作成』

簡単説明

悟飯を溺愛してる異星人。悟空からは豆臭いと言われている。仙豆係で、「仙豆だ、食え」が有名。

本名 トランクス

二つ名 『トランクスルー』『ウザンクス』

能力 『絶対無視』

簡単詳細

誰から見つけられない、無視される存在。『ザマス』と『ザマスルー』も特徴。

そして、いざ出番となると『僕がイケメン！最強！最上！できる男No. 1！トランクスだあ！』とかほざく。

作品原作 僕のヒーローアカデミア

本名 カナデ シンジヨウ 奏 心浄

二つ名 『感情を失った人間』『神経を犠牲にした人間』

能力 『面霊気を扱う程度の能力』『霊力を扱う程度の能力』『魔力を扱う程度の能力』『妖



力を扱う程度の能力』『神力を扱う程度の能力』『変換する程度の能力』『浮遊する程度の能力』『全てを強化する程度の能力』『愛を司る能力』『開花させる程度の能力』『進化する程度の能力』『密度を操作する程度の能力』

#### 簡単詳細

絶対に無表情な為、学校ではいじめられていた。特に本人はどうも思っていないく、シスコンで、妹のこころの事が大好きなのが特徴。しかし、敵に襲撃された時に不思議な声により、無個性から、多重個性所持者になった。現在は、神経が無い為、半分植物人間。しかし、個性で何とか動かせる。

怒った時は面が無表情なのに、面が鬼を超えた何かに変化する。

作品原作 この素晴らしい世界に祝福を!

本名 アカツキ 暁月 ドウ 銅

二つ名 『鬼神王』『魔王軍幹部』

能力 『鬼神王の力を司る程度の能力』

#### 簡単詳細

楽しみを生きる魔王軍幹部。元は転生者で、人間。そして英雄とまで呼ばれる者だったが、魔王に土下座されて、魔王軍幹部になる。2人の従者を従えている。中々の実力者で大地を殴れば、大きな街一個分は凹ませるほどの腕力を持つ。結構、ヒヤツハーしている精神年齢イキリ中学生な、元高校生。

作品原作 この素晴らしい世界に祝福を！

本名 無漏井<sup>ムロイ</sup> 神奈<sup>カナ</sup>

二つ名 『シスコン』『紅魔の里の族長の義息子』

能力 『界王拳』『不死身の肉体』

簡単詳細

アクアという、駄目な女神、略して駄女神のお陰で界王拳を得られたが、穢土転生という『NARUTO』の禁術をされた状態で不死身の体を手に入れた、現在シスコンの転生者。

女性みたいな名前だが、気にしない。

作品原作 僕のヒーローアカデミア

本名 江麗宮<sup>エレイミヤ</sup>

二つ名 『悲しみの憎悪者』『悲しい人生を背負う被験体』

能力 『九種の巨人になれる程度の能力』『超再生』

簡単詳細

幼い頃に、死んでも生き返る程の再生力を持っていて、虐待を受けていた。四肢を切断され、皮を剥がされ、目をくり抜かれたが、実際に体を消滅させないと殺す事は不可能なので、生き残っていた。そして、虐待のために売られていたが、今度は何処かの研究施設に売られて、薬を投与されながら被験体として生きる。

その後、その研究施設を脱走。今ではヒーローを興味本位で目指そうとしている。

作品原作 僕のヒーローアカデミア

本名 神威<sup>カムイ</sup>

二つ名 『宇宙最強の男の息子』 『夜兔最強の兄妹』 『雷槍』  
能力 無し

簡単詳細

銀魂の世界から、ヒロアカに転生してしまった。宇宙最強の男『海坊主』の実際の息子。転生し直ぐ幼い頃に両親を殺されたが、特に何とも思っていない、修行を続けて、単なるパワーや経験はオールマイトをも凌ぐ。銀魂の世界から転生してきた直後は若干驚いていたが、目標は変わらず、最強の称号を目指す。

本気で殴れば山を崩すのは容易い。

作品原作 僕のヒーローアカデミア

本名 悲愛ヒアイ 静寂セイジャク

二つ名 『最凶の寄生被害者』

能力 『悲しみ哀しみを力に変える程度の能力』

簡単詳細

ヴェノムもといシンビオートに体に乗っ取られて、親と兄弟を自らの手で殺し、

哀<sup>悲</sup>しみを大量に吸収して異常に力が上昇してしまった主人公。(それまでは非力な無個性扱い)

敵<sup>ヴィラン</sup>連合に入ってしまったので、本来の主人公達と敵対関係。和解ルートも存在。  
シンビオートを纏う事で、オールマイトと互角に戦えると思われる。

作品原作 Undertale

本名 <sup>シュ</sup>shu <sup>ペイ</sup>py

二つ名『調停者』『2人の最凶スケルトンの母』『第2の最弱』『第2の最凶』

能力 無し

簡単詳細

Sansと攻撃方法は同じだが、全ての攻撃は即死。

<sup>F</sup>h<sup>r</sup>a<sup>r</sup>a<sup>k</sup>に決意での勝負で年単位で長期に及ぶ戦いを繰り返したが、力尽きる。  
また、攻撃方法は同じでもパターンが全て異なっている。密度も更に上がっている。

作品原作 ドラゴンボール

本名 ヤクモ 八雲 ゴセイ 悟星

二つ名 『妖怪の賢者の弟子』『幻想に愛されし者』

能力 『万物を変換させる程度の能力』

簡単説明

幻想の存在と龍球の世界が完全に混ざり合った世界での生まれた主人公、種族はサイヤ人。八雲家の住人。

一番物語を構築させているが、物語進展が余り進んでいない。(削除して、現在はリメイク版を書き上げています。)

藍姉さんの事は一番尊敬している。

作品原作 ハイスクールD×D

本名 仙波センバ 久留蛾クウルガ

二つ名 『2人の最強の魂を持つ者』

能力 無し

簡単詳細

能力は無しとあるが、万華鏡写輪眼や輪廻眼を会得しており、千手柱間の細胞があるため、うちはマダラと千手柱間の力の集合体のようなもの。実際には本人が幼い頃から前世の記憶があるため、修行を望んだ、というより、精神年齢が体に引つ張られているために、マダラから修行を勧められるのでやった。

殆どの2人の術を使役する。ウィキペディア先生で千手柱間とうちはマダラの事を知っておくと、その力が絶大な事が分かるよ!

作品原作 この素晴らしい世界で祝福を!

本名 神になったことにより不明(無くしたという意味)

二つ名 『転生神』

能力『チートを与える程度の能力』『転生させる程度の能力』  
 簡単詳細

魔王を倒したあかつきには何でも願いが叶うという、権限を使って転生する前に時間逆行をした転生者。

前の失敗を改竄するために、神になり、転生者を転生させる神になった。神になったお陰で全神王と知り合いの関係だが、上位の神では無い為、接点は少ない。

作品原作 ONE PIECE

本名 宮下<sup>ミヤシタ</sup> 桜花<sup>オウカ</sup> ↓ メリオダス

二つ名『元十戒統率者』『豚の帽子亭の店長』『麦わら海賊団の金髪エロコック第2』  
 能力『魔神化する能力』『殲滅<sup>アサルトモード</sup>モードになる能力』『全<sup>フルカウンター</sup>反射』

簡単詳細

ルフィが出港してから直ぐに出会った魔神の少年。その実態は七つの大罪の主人公のメリオダスの力を手に入れた転生者。



一時期は四皇の1人とドンパチやったり、海兵の英雄と呼ばれるガープとも戦った記録があり、勝利している。

実際には何十億という賞金首の可能性がある、が、現在は何も懸賞金がかけていない。

作品原作 転生したらスライムだった件

本名 ヤゴコロジン  
八意 仁

二つ名 『九柱魔王の一角』 『最古の魔王と親しい者』 『最強の称号』

能力 『超サイヤ人4月夜之王』 『サイヤノオウ歴戦之王』 『ウイ身勝手之極意』 『アス闘神之王』 『不老体』 『瞬間移動』 『超

猿化』 『超猿化2』 『超猿化3』 『タダヒトリ伝説化』

簡単説明

前までは、十一代魔王の一角だったが、現在は九柱魔王の一角。

詳しい能力詳細は本編で!ちなみに結構未来の主人公なので、物語現在進行中の主人公の未来の姿。

本場に最強。

既に呼ばれている作品達（クリスマスパーティー準備員）

作品原作 東方Project

本名 ゼノ・ジーヴァ

二つ名 『歴戦王』

能力 『龍脈を司る程度の能力』『生命の力を司る能力』『擬人化』

簡単詳細

現在はクリスマス企画のパーティー会場の準備役員。

強さは折り紙つき。

一人称は我。

一度は幻想郷の力の大部分（博麗大結界も込み）を（本人の意思ではあるが、悪意は無い）奪ってしまおうとしたが、霊夢達に阻止される。

作品原作 この素晴らしい世界に祝福を！

本名 ??? ↓十六夜 咲夜

二つ名 『銀の万屋』『メイド長』

能力 『全ての時を司る程度の能力』

簡単詳細

既に300年程生きている年長者。転生直後は普通の東方が好きだった女子高生。

今までは悪徳貴族に拾われ酷い仕打ちを受けて、常識が少し狂っているが、割と常識人。

十六夜咲夜が大好きだったので、彼女の生き様を自分で再現している。

作品原作 転生したらスライムだった件

本名 サカグチ カゲロウ  
坂口 影楼

二つ名『リムルの配下』『リムル軍幹部』『法皇直属近衛騎士団筆頭騎士の兄』

能力『剣豪者』ケンキョウメシモノ『怨霊者』ニクムモノ『破壊者』コワスモノ『救済者』スクウモノ『物理攻撃絶対無効』『魔素使役攻撃絶対無効』

簡単詳細

5歳頃に母を失い、そこからおかしくなった父親から虐待を受ける。

転生する際、ユニークスキルを4つ入手していた。

極度のシスコン。

呼び出し勢というよりメタい勢

作品原作 色々

タイトル

本名 御立<sup>ミタチ</sup>???  
稀星<sup>キセイ</sup>

二つ名 『太古の禁忌』

能力 『法則を司る能力』 『天体を操る程度の能力』

簡単詳細

活動報告にオリキャラ置き場に居ます……都合が良いキャラなので介入しました。

作品原作 色々

タイトル 土方十四郎になって異世界漂流記!?

本名 土方<sup>ヒジカタ</sup>十四郎<sup>トオシロウ</sup>

二つ名 『絶対の転生者』 『完全無欠』 『最強の最強』

能力 (量が多いので、「転生」<sup>ルミア</sup>「俺とお前どっちが強いかな?」悪笑)に一部を記載さ

れているので読み返してみてください)

簡単詳細

都合が良いチート転生者。全神王とは良い仲？

絶対に死なないし、魂を消されようとも生きている。

また、能力を無効にしようとしても、本人か全神王しか解除出来ない。

無効化というより、無視して殺害するのは、赤屍蔵人のみ。

作品原作 ドラゴンボール（仮）

タイトル 全神王の役割

本名 全神王

二つ名『全ての神』『全ての神を統べる王』『多重人格過ぎる神』

能力 土方とは比べ物にならない位多過ぎるので、揭示不可能。数だけを言うならば、

9605不可思議8593那由多3291阿僧祇7268恒河沙5379極405  
 3載9687正8683澗2086溝1093穰7682杼5989垓6621京8  
 705兆9906億5632万7936個

の能力を所持している。

### 簡単詳細

上の能力の個数のお陰で感情が何百とある為、基本的にどんなキャラにもなれる。ただ数億年に一度、本来の感情が出てくる。その感情はとても臆病で能力も使役できなくなる。

また、上の数は分布した能力の一部で自分の分身を約906不可思議体作り、均等に分配しているため、これも本体に近い分身に過ぎない。本当の数字は完全に人智を上回り、天文学的数字を優に超え、神智をも優に越える程の能力数。(因みに作者も正直なところ細かいところはまでは分かっていない)

各自の現在世界で作られている最強キャラ達とは結構良い仲?と言うよりは、無理やり連れ出している。

次回 コラボ相手の方々



## クリスマス企画だよ!全員集合!!設定集②

『ブルーレッドスカーレット』様より!

本名 ルミア

二つ名 『全世界<sup>調停者</sup>の神』

能力 『全てを司る程度の能力』『無限近く体力を所持する程度の能力』

簡単詳細

全世界の神、ウチの中ではかなり神位が高い。

神であるが、人間である。という矛盾の存在。

何でもありなところもあるため、度々登場する人物。

昔に

——— という過去があり、心の闇は誰一人として振り払えな

い、しかし、それも人と上位までの神の場合、唯一全神王がそれを振り払えるが、本人が望んでも居ないし、全神王にも口では、やってあげるよ?と、言っても、実際にやる気は無い。

閑話として、本人曰く、能力の程度については、どんなに強力な能力だろうと程度に

は変わらないとのこと、能力保持者が能力自体の進化or覚醒を行うという希少な現象を起こした場合、程度は無くなる。因みに本人は簡単に程度を無くせられるそう。

因みに、程度を無くした場合の効力を例えるなら、咲夜の能力が、『時間加速』と『時間停止』のみならず、『時間逆行』そして、空間の時間を止めるのでは無く、惑星級の空間の時間停止、または複数人という個体の時間停止などが出来る様になったり、時間停止への耐性を持つ者にも必ず作用する様になる。また、全く同じ能力でも程度がある場合はそちらが優先され行使される。

『カリーシュ』様より！

本名 クト

二つ名 『非常識外れの異端者』

能力 『ありとあらゆるモノを狂わせる程度の能力』

簡単詳細

基本的に何処にでも居そうで何処にでもない美少女？

(ク：おい、待った、何で疑問符を付けた?)

(作：いや、だって、美少女は確かだけど…)

(ク：ちゃんと理由を説明してもらおうか、こっちの作者さんヨオ?)

(作：これ以上は言えません、言えないっしたら言えません)

(ク：おーい☆〔トランクス風〕)

出身はクトゥルフ神話から、そして、本質は「壊れたデウス・エクス・マキナ」

若干サドっ気がある。基本的に飄々とした巫山戯た性格。サド成分がある為か、悪戯や、基本的に事件の主犯を知っていても、ギリギリのラインで教えたり、教えなかつたり、しかし、それで怒られることもしばしばある様子。事情があり、死ねない体なので、逃げる時にデスルーラを選択する事もある。因みに、本来の能力は現在、紆余曲折あり、完全封印しているが、その封印するまでの期間で起こった事はひどく後悔している。

口調は中性的。そして、何故か自虐的で、自己評価が「イキツたクソ」。メタ発言も多々あるので、よく登場する。

戦闘になったら、性格が変わるといふ、こち亀の様にバイク乗ったら性格が激変するという本田の様にはなる筈もなく、普通いつも通りにしていて、手抜きをして、相手とギリギリで渡り合っているとよような快樂主義者、しかしそれで負ける時がある。しかし、それでも十分に強い、そう例えるのなら大体、私の作品の大半の主人公達は勝てな

い。

本気の戦闘の場合は、かなりヤバく、渡り合えるのは全能の者たち。

普段は力を完全封印しているので、中々お目にかかれない。

因みに、全神王（作者じゃない方）からは、最愛と言って良いほど気に入られている。

『黒いサクマ』様より！

本名 イザヨイレン 十六夜 蓮

二つ名 無し

能力 【成長を早める能力】【作りかかれた物の物を完成形に戻す能力】  
 簡単詳細

東方の世界にシヨタ転生した主人公。八雲家に呼び出されたのか、拾われたのか、取り敢えず居候させて貰っている、完全なギャグの世界で、ツツコミ兼ボケ役、主に植物等を用いた攻撃をする。

アリスの事を師匠の様に思っている。

本名 サリザキ タヒト  
去咲 旅人

二つ名 無し

能力 現段階不明

簡単詳細

活動報告にて、知らされていたキャラクター（黒いサクマ様の）現段階では能力は不明であるが、極度の妖夢好きである。（つまり妖夢の前ではボケ入るツツコミ系男子）本来はクール系男子の一員のイケメン。

護刀を二本持ち「朱」と「京」と呼ばれ、朱は護る刀で、京は斬る刀とされている。作者曰くキムタクをイメージして作られたのだという。

本名 イズモ アズマ  
出雲 東

二つ名 無し

能力 『忍術を扱う程度の能力』

簡単詳細

完膚なきまでのギャグキャラ、しかし、中々手強い。そんな巫山戯た忍者様でも、作者も思ってるんですよね、忍者ってかっこいいよねって。

やっと開催されたよ！取り敢えず楽しむだけだよ！クリスマス会！①

全神王《「「ふいー、やっこの声だぜ？」」》

土方「その表記面倒臭いからまだ我慢してろ」

全神王『神になんて態度なのこの子？』

ルミア「それでも普通に話すんだな」

クト「ま、それでも声が何重にも響くけどな！クケケケ！」

土方（俺と居た時とは全然違う喋り方だなオイ）

全神王『さあ！シヨータイムといこうか！』

そして、何でもありな彼等神と転生者一行は、クリスマス会場にそれぞれ向かった。

そして、全員やっとな揃ったところで……

はい一緒に！

全員『『MERRY  
クリスマス!!』』

全神王『ま、もう2、3ヶ月たってるんだけどなw』

土方「それを言うなよ!」

それからというもの、それぞれ用意された食い物を食い荒らしたり、勝手に誰がモテるかコンテストやつてたり、破壊活動が起きたり……少ない女子陣営の者達はシヨタの子を弄んだり……。まあe t c …。

準備はいいですか?

YES ◀?

NO

土方「いやこんな選択肢いらねえだろ、というか説明が雑になってきてんぞ!中の人!」

神奈「第一回 俺たちはシスコンでは無くただの妹溺愛者だ！の回を始める!!」

影楼・心浄「おー」

神奈「おいおい、ヤケに鎮まつてるな、もつと、ワー—————!!みたいな感じなの無いのかよ？」

影楼「参加者が3名だけなんでな」

心浄「俺は何も感じない」

神奈「乗り気なのは俺だけかよ！」

心浄「まず、俺は素直にシスコンと認めよう」

影楼「俺はただの溺愛者だと認めよう」

神奈「……この企画の意味よ……というか、別れたな」

心浄「……俺は今、どんな事を思えば良いのだ？」

神奈「知るかー!!もうどう話進めるか分かんなくなっちゃまったな……」

土方（その前にシスコンを認める事を否定しないのか……）

一方その頃ドラゴンボール（ギャグMAD等）

クズロット「あ、あ、あぁあ!!?てめえ！仁!!よくもオレの肉をー!!」

仁「知るかー!!お前がオレよりも食うの遅いだけだろ!!」



ベジータ「それはオレの分も入ってたんだぞー!!許さん!」

クスロット& amp ;ベジータ『死ねええええ!!』

仁「イレイザーキャノン!!」

クスロット「いい!?なーんちやって!」ピシユイン!

ベジータ「ダニイ!?!」

デアーン☆

仁「甘いぜ!そう簡単に俺から肉を奪えると思うなよ!!」

ベジータ「くそおお:」(半泣き)

ベジータ「勝てるわけがないYO☆」

仁(復活はええなオイ)

クスロット「今だ!!」(目潰し)

仁「まだ甘:ツツギヤアアア!!?」

なんと!クスロット兼力カロットから目潰し用の指を掴んで安心しきっていた仁!

しかし!その指から目に向かって気弾が放たれた!

クスロット「フハハハ!サイヤ人の面汚しめ!」(ターレス風)

クスロット「この肉はオラのもんだー!!」

ブロリー「神威!死ねえい!!フン!」ポヒーン☆

クズロット「ああ!？」

デーン☆

ブロリー「あつ」

神威「あらら、ヤッチャッタね」

神威（……気を操るってどんななんだろう？）

ブロリー「テメエのせいじゃねえか！このヤロー!!」

パラガス「やめろブロリーい！落ち着けええ!!」

神威「フンツ！」

ドゴツ

神威から一撃が加わるが、ブロリーは動じない。

アニメのスペック自体が違うし、戦闘民族同士で技量は神威が上回るがブロリーがそれを覆すほどのパワーの持ち主なので仕方ない結果と言える。

因みに何でブロリーがこんなにも神威を殺る気なのかというと、こちらも同様、食事を勝手に食べてしまったからである。それに巻き込まれたクズロットは哀れ：いやこんな事をクズに思っても仕方ないので無視する。

またある一方

転生神「ほう……その刀、随分と意思が宿っているな」

蓮「あ?分かります?」

転生神「俺もこんな風な強い刀を与えた上で、生を授からせてるからな」

刀神「ねえねえ、蓮くん!?俺貴方の使い魔的存在じゃないんだけど!?!」

転生神「使い魔ではない、お前は物だ」

刀神「…せめて元人間といってほしいな、人間であつた尊厳を傷つけられるぞ…」

蓮「うん、刀神は俺の相棒だよ!」

刀神「うわっ!スッゴイ笑顔なのにドス黒いオーラが谷間見えるな!なんでだろう!」

転生神「お前はそのままの性能でもらつたのだな、桜花さん」

メリオダス「今はメリオダスって名前なんだけどな」

転生神「にしてもメリオダスか、そういうのはあまりよくないとは思うがな」

メリオダス「……何故だ?」

転生神「本来、その力はその人が努力して手に入れた結晶の様なモノだ、まあ、メリオダスの場合元々の血筋の物だが…まあ、つまりはその本人の努力を踏みにじつて様



!!  
」

ベジータ「俺はサイヤ人の王子なんだ……お茶やー!!!サイヤ人の王子、ベジータが相手だ!」

仁「クソツタレええ!!ピッコロさん!仙豆下さい!アイツをそのまま生かしておくわけにはいかねえ!!」

ピッコロ「飲み頃に冷やしておきましたぜ」

パラガス「お前、なんだか他キャラ混ざっていないか?」

蓮「そのまま続々とブロリーたちを追いかける被害者達……」

蓮「ええ、僕も行った方がいいの?これ?」

刀神「当たり前だあー!!俺たちの力を見せてやろうぜ!!」

蓮「いつから、コンビ組んだの!?!」

それから続々とブロリーと神威を追いかける、仁とクスロットとロリータと変態オヤジと、転生神と魔神と蓮さんと刀神(相棒(笑))……まだまだ続く!!

やつ t t ( r y 「タイトル長えんだよ」 b y 土方 「さつさ  
と始めるぞ」 b y ルミア②

土方「……………」

ルミア「……………」

クト「え？何この空気？」

稀星「二人は元々戦闘狂だから、それに…力を手に入れてしまったから調子に乗っているのもあるわ、あの土方は」

クト「アンタ誰？」

稀星「別に貴方に名乗らなくてもいいでしょう？」

クト（あー私が苦手なタイプだー）

稀星は親しい人物や可愛いもので出ないといつも素っ気ない、それに何故か知らないが、常に全身を包むように紺色のマントを羽織っている、側から見れば変な人だ。因みに、現状で稀星みたいな人物はいる、まあマントは羽織っていないが。それに彼女はそんなに心を乱すことは少ない。ちよつと次に出るまもないので、ここでフルネームを言っておこう。『詠禍 干那』それが彼女の名だ。



い、ただ虚無空間が壊れたまた次の世界が壊れ、壊れ、壊れ…二人はそれを0.000000000001秒にも満たない速度で何十万という世界を壊していく。

付き添い、というより見物している全神王はそれが、何も工夫されていない世界、魔法しかない世界、ただの能力者のみが住んでいる世界を復活させないで放っておく、これから連載されそうな世界、想像創造されそうな世界の端子は復活させているが、そのお陰でまた新しい分岐世界が出来てしまった。

しかし、そんな事は気にしない、また何億、何兆という分岐世界が起きただけの話、問題は無い。

土方「だあああ！めんどくせえ！さつきからガラスが割れるのを何千億回も見た！もう目が疲れてきたぞ！」

ルミア「知るか！お前が世界を壊す勢いで斬ってるから悪いだろ！」

土方「実際俺が見たガラスが割れる数と比例して壊れてるからな」  
ルミア「……まだやるからな」

土方「分かっているよたった一秒じゃ物足りねえ」

これから、全神王や強さの基準が規格外で高ランクな創作物の最強チートキャラで見れない領域に入るので、地の文で何とか表現してみよう。

土方は四つの剣を後ろに浮かしており、それを操作している。勿論本人も二本持って



いるが、方やルミアは一本のみ、しかしそれでも渡り合える、そもそも、土方も一本が本気状態だ。数が多い程手加減しているである。

因みに、土方が浮かしている4本の剣の名前は、『重力の剣』『消滅の剣』『絶命の剣』『絶呪の剣』、そして、土方自身が持つ剣は『世界崩滅愚食剣』。

ルミアが持つのは『絶望の神秘剣』だ。

その内一つがぶつかっても必ず世界は消し飛ぶ、神器とかそういう次元の話では無くなっている威力なのだ。

巧みに四つの剣を操作して光速の速度でルミアに斬りかかっている土方、しかし、両者にとつて光速など遅いに等しい。度々能力を使いお互いの神経を切り裂いたり、内臓を破裂させたり、そのまま空間を支配して脳に直接洗脳信号を出しても二人は全く通じない。破裂しても、空間転移で本当に体内に星破壊爆弾を転移させても生き残るし死なないし瀕死にもならない。ダメージにすらならない、この今持っている刀で切っても結果は変わらない。ならば二人はどうやってダメージを与えるか？簡単だ。

「オーラオーラオーラオーラオーラオーラオーラ!!!」

「無ー駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!!」

互いの持つ肉体で殴るしかない。

絶対消滅という能力を使っても消滅ない二人は何処までも世界を破壊しながら戦つ



クト「次元の穴空いたまんまだけどほつといていいのか？」

稀星「いいんじゃない？」

干那「私たちにとつてはいつでもいい事だわ」

ハテナ・レギオン（以降ハテナで表記します）

「え？無視でいいんですか？」

クト「そんな敬語じゃなくて o k o k ! じゃあ！メンバー集まったんで！クトユルフ  
TRPGしようぜ！」

ハテナ「クトユルフ？」

クト「え？知らんの！」

稀星・干那『興味無いわ』

クト「ヒヤー！これはドギツイぜ！だがそれでもやるぞ！ていうか知らなくても出来  
んだろ！」

稀星「私はパス」

干那「……」

なんという事でしょう、もう興味を失い読書をしているではありませんか。

クト「えー、萌<sup>燃</sup>えないなあ」

ハテナ「意気消沈するの早くないですか!？」

クト「フツ、諦めも肝心さ」

オオオオオオオオオオオ!!!

女子陣営「？」

クト（一応女子）「え？何々？なにこの声？」

ブロリー「いい加減に当たれやこのヤロオオー!!」

神威（動きが）単調なんだから仕方ないでしょ」

ブロリー「チィ！」ポヒーン！

クト「あ、ヤバ」

稀星「！」バチン！

魔法の術式を展開していた干那はそれを止め、クトは何故か持っていたロードローラーを捨て、ハテナは自分のエネルギーで形成した光球を手元で消し：男子陣形とは全く違うちゃんとした迎撃態勢が取れていた。

因みに、生身の稀星がブロリーの惑星破壊級の気弾を弾いた場合、火傷にはなるが、その他は大丈夫だ。しかし今回は火傷も無し、それは稀星の二つの能力のうち一つ『法則を司る程度の能力』の権能のお陰である。

時空の流れの法則、あのまま誰もせずにあたつていたらという未来の法則と逆の法則に従つた世界を構築し、元々無かつたことにしたので。

作者もすでになに言つてるかわからない状態だから気にするな！

そしてその二人の追いかけっこを見送つた後直ぐにまた男子陣營の波が来た。

仁「待てやブロリー！」

クズロツト「オラオメエを絶対許さねええ!!!」

ベジータ「茶—————!!」

パラガス「なにもかもおしまいだ……」

ピッコロ「何を寝言言っている！そんなこと言っている暇があつたら奴を！奴を！仕留めろお！」

転生神『『煙滅』』

メリオダス「神千切り!!」

次々と追いかけて、技を繰り出しているメンツより少し離れたところでは。

蓮「ええ……本当について行くの？」

旅人「いいから行くぞ！俺の取つておいた寿司をアイツは逃げ際に食つてつたんだからな！」

蓮「アンタそんなキャラだっけか!？」

刀神「俺たちの力を見せつけるんだ!そして!俺の出番を増やしてもらうんだよお!!」

こんな会話が起きていた。

蓮はもう被害者で、キャラ崩壊寸前である。

例で言えば、元々純粹だったり可愛げあつたキャラが周りの奴らがボケすぎて、ドギツイツツコミという名の暴言を吐くアレだ。

しかし、そんな蓮にも救いの手が…

グイッ

蓮「!？」

稀星「……(この子…可愛い…)」

蓮「え?ちよつと!？」

稀星「ちよつと私たちとお茶しましょう?」

刀神「ちよつと待ってくれよ!俺たちはあのゴリマッチョの…」

稀星「……」(無言の圧力)

ハテナ「き、稀星さん、顔怖くなってます」

干那「この刀喋れるのね」

刀神「あ、お姉さん、分かっちゃいます？俺の凄さ」

干那「いいえ、別に」

蓮（と、刀神が完全にシカトされてる！一応世界最強の神器とか何とか言われているのに！）

クト「あ、コイツア、面白いな刀だね、一本折つとく？」

刀神「え!？」

クト「クツケケケケ！冗談だよ冗談、でも刀が喋り相手っていうのも虚しいねえ…」

蓮「いや、虚しくはないですけど…」

稀星「私の膝に座る？」

ハテナ（こんなキャラじゃなかった様な…）

蓮「え?…:…:…いや、え?…:…:…いいいんですかかか!？」

稀星「いいわよ、別に」

クト「さつきと全くキャラ違ってんじやんwま、ちびっ子君も座んな、こういうのは経験しとくもんが得だぜ？」（中身が成年男性という事がわかった反応）

というか、コレはあの展開だ。おっさんがシヨタ化して、お姉さんたちにちやほやされる展開だ。

旅人「……蓮はどこ行つた？」

いつのまにか、蓮が戦線離脱していた事に気付いた旅人であった。

因みに、ブローリーと神威の被害者は続出中、いつこの会場が壊れてもおかしくない被害になるそうです。



クリスマス（ryねえこれ何の企画でもないよね？

さあ、現在本来ならもう一年以上前に終わっているはずの今回の企画、クリスマスもとつくに過ぎ新学期が既に始まっている時期に何やってんだと思いますが、作者がクズなので仕方ないです。

そんな現在行われているクリスマス会は混沌を迎え単なる喧嘩大会みたくなっていた。

そして、その会場の耐久値が、ついに、60%を切りました！

さあ！開始早々、たったの3話目で40%以上も耐久力切れる会場とは一体何なのでしよう！

まあ、仕方のないこともあります。

破壊神の申し子、悪魔の兄の異名を持つ惑星破壊級気弾を撃ち続けているプロリーに、魂ごと消滅させる転生神の技の数々、メリオダスの不死身でも再生できない傷を負わせる程の獄炎。

惑星破壊級という気弾なら悟空達にも適用する。それが何百発も撃たれば当たり前なのだ。というか、全神王お手製でここまで壊れることは滅多にない。まあ手抜きで

はあるけど！

そんなとこでの今の勢力図を貼っておきましょうか！

元凶チーム

ブロリー（ブロリーMADのブロリー）（ウチの子）

神威（ヒロアカ世界線に流れ着いた銀魂の神威）（ウチの子）

この二人が食べ物を先にとって食ったために喧嘩は始まった！

追撃チーム

仁（超サイヤ人1, 2, 3, 4, 伝説の超サイヤ人, 3, 身勝手の極意）（転スライン

サイヤ人）（ウチの子）

クズロット（超サイヤ人2）（ブロリーMADの住人）（ウチの子）

ベジータ（超サイヤ人1）（ブロリーMADの住人）（ウチの子）

パラガス（POD要員第1）（ブロリーMADの住人）（ウチの子）

ピッコロ（ブロリーMADの住人）（ウチの子）

旅人（剣士・妖夢溺愛者）（応募参戦キャラ）

転生神（ギフト付与、神器付与）（そんな高位じゃない）（ウチの子）

メリオダス（魔神の力）（ONE PIECE×七つの大罪（メリオダス））（ウチの子）  
蓮&amp;p:力神（戦線離脱）（とりあえず何でも切れる能力）（応募参戦キャラ（左）  
+ウチの子（右））（ウチの子は本当に刀）

食べ物の恨みってコワイネ！つうか、つまらない理由で争いすんなよ！

他所喧嘩チーム

ルミア（全能）（応募参戦キャラ）

土方（全能）（ウチの子）

全神王（観戦）（全知全能？生ぬる過ぎるわ！）（取り敢えずヤベエ奴）（ウチの人）（作者みたいな奴）

放っておいて大丈夫？ うん！大丈夫！

女子陣営チーム

稀星&amp;p:蓮（法則操作・天体支配）（不完全な物を完全にする能力）（ウチの子）

（応募参戦キャラ）

クト&amp;p:力神（え、待ってなんでセットとして扱われてんの？）（狂気だよ！狂

気！(???) (応募参戦キャラ+ウチの子)

干那 (複製する程度の能力) (応募参戦キャラ)

ハテナ・レギオン (魂を操る程度の能力) (応募参戦キャラ)

蓮くんは刀神と一緒に行動していたのですが、可愛いからという理由で蓮は稀星に捕まり、刀神は面白そうな物発見とクトに確保されました。そして今現在刀神を持って眺めている状態です。

稀星は蓮を膝の上に置いている状態。クトと刀神は…うん…まあ…うん。

干那さんは興味なさげに本読んだり紅茶飲んだり洋菓子食ったり、ハテナさんは事態收拾追いついてない感じですよ。

戦力外 (未参加) チーム (全員ウチの子)

久留蛾 (クレイジーサイコパスなお爺ちゃんと優しいけど忍の神なおじいちゃんのと合体) (訳 マダラと柱間)

銅 (鬼神王の力持った単なる転生者)

神奈 (穢土転生&amp; ; 界王拳持ったつままない転生者)

影楼 (幽霊。某海賊漫画の緑髪の剣士 (見た目は違う))

心淨 (東方の一般的な力全てを得た代わりに無感情、無神経 (物理) になった奴)

宮（九つの巨人の力持つてる被験体）

悟星（サイヤ人）（転生者じゃない）（万物を変化させる程度の能力）

ストツパー！チーム

咲夜（時空間移動、時空停止。時間逆行）（ウチの子）

ゼノ・ジーヴァ（生命エネルギー操作）（ウチの子）

shupy（即死攻撃）（ウチの子）

???

トランクスルー（絶対的無視）（ウチの……？）

ト何とか「ハア☆」

挑戦者が現れました!!

???(完全古参キャラ)

一方その頃、作者が無駄な説明をしている時に…。

久留蛾「さつきから子供みたいな喧嘩が起こっているけど大丈夫なのここ？」

銅「大丈夫なんじゃない？現にホラ、この会場にヒビだつて入つて……」

ピキッ！

銅「……逃げよう」

神奈「いやいや、メンタルチキンか!?一応うちの世界の魔王幹部なんでしょ!？」

銅「いや、だつて……ねえ……」

神奈「何かそれ言い回し過ぎてない？」

1人、魔術使う人の様な服装を着ている神奈と、如何にもな悪役の格好だけした銅はこの会場に不安を寄せていた。さつきから周りで起きる爆発音と幼稚な言葉の飛び交い。急にさつき現れたロードローラー。今度はタンクローリーでも降つてきそうな勢いで炎が上がったり、ちよつと手を伸ばせば届くぐらいのテーブルが消滅したり。正直なところ何がクリスマス企画だ……と言いたい。というか既にクリスマスなんて季節じゃない。バカなんじゃないのだろうかここの作者（書いたの自分）（DMではない）

宮「騒がしい……」

久留蛾「そうだな、そろそろ止めるか……自信はないが」

宮「あの化物共は自制という言葉を知らないのか？」

咲夜「先程から騒がしいですが…何ですかこの惨劇は？」

久留蛾「あ、咲夜さん、あの惨劇は先頭にいる筋肉ダルマノータリンと戦闘狂の夜兎が喧嘩して始まった大乱闘です」

作者「あり？見ない間に随分溶け込んでるね、ウチの主人公たち」

銅「アンタが投稿遅すぎんだよ!!お陰で大分慣れたわ!!つかまたメタ発言もしちまつたし!というかどつから現れたお前は!」

作者「H A H A H A H A! ……本当に申し訳ない…」

急に現れるのが作者というものである。

よくお前いつからそこにいるんだよ…と言われるお馴染みのテンプレ場面だ。

そして今度はちゃんとした登場で…空間が裂け、その穴から二人の人物が出てきた。

全神王『おやおや、もうここまでやっちゃってんのかい?』

出てきたのは先程まで、というより前回まで土方とルミアの戦いを観戦していて、今回の簡単な人物紹介の時に（観戦）というレッテルを貼られていたのに割りとすぐに戻ってきた全神王である。

もう1人は……。

十夢来「……久しぶりだな」

久留蛾・宮・銅・咲夜・神奈・心浄・影楼『誰(だ?) (ですか?) (だよ?) ?』

まあ、無理もない、精々知っているのは土方と全神王ぐらいだ。

この急に現れた謎の人は、昨年の春5月9日から執筆され投稿された『この超越者にも祝福を!』という作品のキャラである。因みに作者の処女作。

しかし投稿した3ヶ月後には消去され、一度はリメイクしたものの、すぐに消された。正直言えば作者が二番目に練り込んだキャラクターだったのに……まあ、可哀想なキャラである。

戦闘能力は全神王に匹敵する程、土方をも倒せる。

実際、当時は全神王以下、土方以上(か同等)という設定だったが、久しぶりの復帰で作者のキャラ知識が増えた為、大幅強化された。

十夢来「お前達の先輩」

忽然と現れた全神王と十夢来、因みに土方とルミアはその数秒後次元の穴からドサッと落ちて来て、今は気絶している。因みに気絶させたのは全神王、会場の方へと異変を感じた全神王はもうこれ以上話が進まないの戻ってきたのである。

全神王『えー……もうこれだけ暴れてんのかよ? 嫌やわー、ホンマに困るわー、いっちょしばいてあげようかしら?』



今更だが全神王の人格は数千とあるのでコロコロと口調や態度が変わる仕様になっているので、この一定の決まりの無い話し方には慣れてもらおう他ない……。

全神王『懐かしい設定だな……まあよい、さっさとこのどうでもいい企画を終わらせ、溜まりに溜まっている応募者達のリクエストに答え、参加させねばならぬのだ、このクソツタレ作者のお陰で新人が増えていくからなあ……新しい物語を書くことは構いはせんが、もうちよい自分の立場わきまえたらいいんとちゃうか？ ああ？』

作者の心は罪悪感でいっぱいになった、ライフはゼロだ。死ねばいいのに。駄菓子菓子、生き返る。

作者「取り敢えず……この場の肅清を行った方が良いよな？」

十夢来「つうか、お前俺の存在忘れてたよな？ 最近、自分が昔書き溜めておいた落書き程度完成品しかない小説ノートを見て俺を思い出したよな？」

作者「リアルな話持ち込まないでよー！」

十夢来「まあ良いけどさ……ただ……後でゆんゆんとイチヤイチャしたいんだけど？」

神奈「おい待て、ゆんゆんは俺の義妹だ絶対にやらん」

十夢来「え、ゆんゆんにお兄さんなんていたの!?! かなり前だけど話していた時には居なかつたはず……え？」

全神王『まあ、違う世界線と違う運命路線の滑走路に居たからね、そもそも作品が違

うし世界線は一応あつてるけど…」

十夢来「じゃあ、俺とゆんゆん（13歳）が結婚したのは報告しなくて良いんだな？」

神奈「は？お前人の妹と勝手に結婚してんの？」

十夢来「良いじゃねえかよ！違う世界線のゆんゆんなんだから！そっちのゆんゆんも幸せにしてくれよお！というか、紅魔の里に滞在している時のゆんゆんって話聞いてないけど実際どうなの!?ポツチしてるの!?なら俺はすぐに助けなきやいけねえんだけど！」

神奈「いや、それは安心しろ、ゆんゆんはめぐみんと出会って最近仲良くやつてるらしい、勿論俺も積極的に友達の入ろうと努力している」

十夢来「そうか…良かったあ…いつかゆんゆんに語り合う会やらないか？」

神奈「よし、絶対やろう、後で作者その回作っておけよ」

作者「いや…作るけどさ、ここで人の嫁とかの話やめてくれない？非リアの私にとつてはさつきからグザグサと心が矢に刺さっているんですが？」

十夢来「知るかよ…つうかお前人（応募してくれた方々と読者様）を待たせてるんだから早く編集しろよ…」

作者「…ゴフ…ツ…！」

宮「血反吐か…久しぶりに見るな…自分のしか見ていなかったが人のを見るのは本当

に久しぶりだ……」

銅「え？何？この子どもんな生活して来たの？」急に怖いんだけど。

全神王『2〜10歳くらいまで父親から腕切り落とされたり、喉や目に熱湯掛けられたり、あと首チョンパ、電気椅子に長時間の間座らせられたり……あ、因み人間なら即死なのよね、それと焼き土下座させられたり、後は虐待飽きた親父から研究施設で薬漬け生活、まあヤク中にはなってるから安心しなよw』

「……………」

作者「自分で作っておいて何ですけど……本当にごめんなさい……」

宮「？みんな何故何も喋らないんだ？」

咲夜「普通の人間の精神であれば、同情するのですよ」

宮「そういうものなのか……」

影楼「俺のクソ親父よりも更にクズだな……そいつあ……」

宮「クズってなんだ？」

さらに憐れみを込めた目で宮に視線が向けられた。

うん、作者はクソってはつきりわかんかね。

咲夜「……私はあちらの方にいる彼女たちの方へ応援要請をすればよろしいですか？」

全神王『頼んますわ』

久留蛾「なら俺達はすぐにあの馬鹿どもを止めてくれば良いんだな？」

全神王『めんどつチーからそうしといてね！』

影楼「帰っても良いか？」

銅「めんどくせえ、逃げたい、戦いたくない、アストラとアツシユに任せれば……つてアイツらは居ないか」

神奈「やる気出せよ、俺の世界の魔王の幹部なんだろ？」

十夢来「へえ、魔王幹部ねえ……俺の世界では8人だけどそつちは9人つて事になるのか？」

銅「まあ、そうなる」

久留蛾「いいから、やるぞ！……仙術チャクラを練るか……」

影楼「久し振りに斬るのか……」

十夢来「あのメンバーの場合斬れない奴もいるだろうな……」

女子陣営の方にて

咲夜「お楽しみのところ申し訳ありません…少しよろしいでしょうか？」

稀星「ええ、構いませんが？……あ、ほら蓮くんあーん」

蓮「あ、あーん」（あー、ヤバイよ…理性が…理性が…）

咲夜「貴女達にあの方角の方を見てももらえると解りますが、今回の騒ぎの元凶達を沈静化して欲しいのです」

干那「いえ、関わりたくないので帰っていただけますか？」

クト「いいねえ！いいネエ！ドンパチやろうぜ？クツケケケケ！！」

ハテナ（協調性無いなあ……）

干那「黙って。この本に集中できないでしょう？」

クト「お？私といつちよやりますかあ！！？」

咲夜「やめて下さい、更に厄介になります」

稀星「私からは良いわよ、今回の騒ぎ正直鬱陶しかったのよね、早く終わらせるわよ」

ハテナ「あ、私からも手伝いますよ！」

咲夜「感謝します」

意外と話が早い。因みに咲夜の忠告も聞かずにドンパチ始めたクト、正直もうこれ以上暴れないで欲しいがそれはそれで面白いのでまあアリ。しかし今回は残念ながらカッツである。

久留蛾「須佐能乎……で……アイツらの暴走止められっかなあ……ハア……」

銅「銅さんだっけかなり本気に鬼神王の力解放させてんに勝てる気がせん……あのブロリーには特に……」

既に須佐能乎を完全体にさせ抜刀の構えをしている久留蛾と、鬼神王の力を解放させて体に複雑な模様をした赤色のペイントを施し闘気オーラの様なものを最大出力まで解放させている銅。

十夢来「うん、やっぱりこの太刀はカッコいいな」

十夢来は相変わらず愛刀の『天上天下天地天翔無双刀』片手に持ちながら不敵な笑みを浮かべていた。影楼もあの某海賊漫画に出てくる方向音痴な緑髪の剣士と同じ構え

をとり、迫り来るただの喧嘩大乱闘を待ち構えていた。宮は未だ巨人化しておらず、いつでも巨人化する様に口に手を添えていた。

ここに居る全員がその生きる世界で絶対強者だ。いやまあ絶対では無いものもいるが。

一方、ストッパーチームという責務を勝手に押し付けられた、あの世界で一番エ〇画像が多い骨ことs a n sの母（二次創作）と大陸のエネルギーを何千万という年月をかけて復活したゼノはというと。

shupy「私たちの出番はないのね」

ゼノ「……其方はともかくとして私は足手纏いだろう……惑星の破壊という規模の技術と力は私の世界では存在しなかった」

shupy「そう……なら私もそうかもしれないわ」

ゼノ「何を言う、其方は攻撃すると言う私達の中にあるコマンドという概念を壊せるではないか、攻撃を出来ないなど私達弱肉強食の世界では致命的だ。特に私達古龍が通常の獣どもに逃げるなど、屈辱でしかない」

shupy「そう……何か失礼な事を言ってしまったってごめんなさい」

ゼノ「：別に怒っているのではない：こちらも誤解させてすまないな。そろそろあの馬鹿どもを迎え撃とう」

shupy「ええ」

喧嘩もとい大乱闘停戦作戦開始！

稀星「貴方達は引力を信じるかしら？」

ゴゴゴゴゴゴ！

そんな音が外から聞こえてきた。乱闘している者達は気づかないが、止めようとしていたチームはそのことの正体は何なのか、十夢来は既に何が来るのか分かっているのか動かないが、他のものは構えを解除して空を見上げた。何故忽然と天井が消えているのか、まあ原因は全神王の所為だが、必要な事である。

銅「ゑ」

久留蛾「ヤベエな…」（え、アレぐらいの天変地異マダラのおっさんやったことあんの



？）（精神の中での会話です）

十夢来「雨か…」

久留蛾「いや十分でええよ…しかもこれが雨かよ」

見上げた先に会ったのは、巨大な岩塊。それは明らかに近づいているのが分かる。

稀星「……説明する義理は無いけど、これは惑星の一欠片に過ぎないわ。今回は近く

に蓮くんが居るからそんな惑星そのものをぶつけるなんて、危険なだけだから」

影楼「自分への被害を考えていないのか？」

稀星「私の能力に影響した奴なら問題ないわ。……私はもう降りるわよ」

すつと何処かへ消えた稀星。ついでに蓮くんも何処かへ連れ去った様である。もう

これはヤンデレか。元々そんなキャラじゃないのに。でもまあクールなギャグ（ヤンデレ）要員として活躍をして貰おう。（蓮くんの苦悩は続く）

因みに他の女性陣も全て安全なところへと隠れた様で誰一人としていない。

あ、いややっぱり物の成り行きを見守っている？人が1人いました。

ご存知の通りクトです。

銅「……………え？いや待って!!俺たちどうすんの!!?」

久留蛾「普通に防げばいいだろう」

影楼「この家具にでも隠れておけ。かなり丈夫らしいからな」

十夢来「当たり前だろ、全神王お手製なんだからな、例えば宇宙が消滅しても家具は生き残るだろうな」

銅「何その家具!?! 処分に困らない!?!」

久留蛾「そこか? 俺はそんな丈夫な物より勝手に綺麗になっっている機能を持った家具が欲しい」

十夢来「ゆんゆんと一緒に生活し始めたならそんな家具あつたら買おうかなあ…冒険稼業で忙しいし…いや結構暇だけど…あんまりゆんゆんの手を煩わせる訳には…」

神奈「いや、それよりもだな。まずゆんゆんの友達の数を増やす為に流行の物を調べるとかいう道具をだな…」

影楼「…これ今話す事なのか?」

心浄「…この人達にとってはそうなんじゃないか?」

全神王(ヤベっ、土方とルミアまだ目覚めてない。…いやでもアイツらなら大丈夫か)

意識を失っている土方とルミアは完全無防備状態で隕石の衝突を受けるわけだが…まあそもそもさつきから世界を壊していた大罪人なので問題ない。

徐々に落ちてくる小惑星にやつと気づいた乱闘組は即座に迎撃の体勢を取った。

まずいち早く気づいたピッコロが10円！と言いながら気で形成した巨大な50円を投げ、一番巨大な小惑星を無力化、クズロツトとベジータが合技『ギャリックかめはめ波』を放ち、そのまま奔流する力は小惑星を貫き4個破壊し、僅か数秒も間を開けずにブロリーがブラスターシエルを五発打ち込み、五個の小惑星がほぼ同時にデデン☆という効果音と共に消滅した。

そのまま流れる様にパラウィー化を解除して無限に再生していた変態親父<sup>パッガ</sup>がPODへと乗り込み、それを三倍速で流してるかのようなスピードでブロリーが潰し『親父いブラスター！』と叫びつつ投げ、その迫っていた小惑星またデデン☆という効果音とパラガスの顔を写しながら消滅した。

いやつだったぜ…パラガス…。

ここで超サイヤ人へと変身し、ブレード状にした気の剣を精製していた仁が動く、舞空術を最高スピードまで加速させそのまま小惑星に近づき…刹那の一閃。小惑星は真つ二つに裂け、余波で後ろにあった小惑星もぶつた斬った。そのまま重力に従い会場外に落ちていき、さらにそれを細切りにしようと転生神からの寵愛を受け、一時的に大幅にグレードアップした旅人と、魔神の力を完璧に制御したメリオダスが魔神の翼を羽

ばたかせ加速し岩塊を目の前に急停止すれば、細切れにしようと剣を抜いた。瞬きをすれば落ちていた岩塊は既に無く、パラパラと土が大量に落ちる景色に変わった。

残りあと一つ、なんちやつてドラゴンボール勢が気弾の一つでも打ち出せば良いのだが、そんな隙は無く、ゴウツ!!と音と共に何か飛び出した。それはもちろんのこと神威。その雷槍の名に恥じない速度で突撃し、見事に小惑星の数千メートルという距離があるにも関わらず、その中枢に行き届き拳を振るった。ドンツ!!!と体の芯にも響く音が場を震撼させた。そこを中心上空に有った雲は円形状に広まり蒼明な空があっばれと見えた。その空に気を取られている内に小惑星にはヒビが行き渡り遂には球体の形を留められずに崩壊していった。

一時的にだが乱闘をしていた者達全員の動きを止めた拳句、協力させた稀星はやはり相手にしたら厄介系の味方であることは明白だ。

暫くの間、音を立てた者は居なかった。



クト「あつりりく？おつかしいぞオ？」

全神王「ま、そいつの体は半分死んでるようなもんだからね、神経がないから表情筋も生み出せない、感情がないからな、それに元々の胃の機能も停止してるんだよね、じゃあなぜ体が勝手に動くのかって？大人の都合さ！」

クト「ほむほむ、しょうがないなア（トランクス煽り）さてさてさアて！S A N 値チエツクのお時間ですよ！」

心浄（S A N 値？）

咲夜「始めてしまいましたか……」

銅「うおっ!?!居たの!?!」

咲夜「突然ですいません……一番暴れていた方達の対処に行っていました」

咲夜が指を指す方向を見れば後ろの方ではサイヤ人十もう一人の戦闘種族もとい神威が混ざって飯を漁っていた。ナイス判断！と言いたい、また食べ物関連で喧嘩になっても困るものだが、それはもう勝手にやってほしい。ただ巻き込まないでほしいというのが望みだ。

一件落着きかのように思えたものだが、実際まだ問題はあつた。

それは今さつき起こつた事案で……

心浄「スペル発動。無知『空白の7年間』」

眩いた瞬間その弾幕は展開される。クトがいる空間の全方位に弾幕が張られ、まるで檻のようになる。それはクトに襲ってくる気配はなく暫く拘束類、又は行動抑制類のスペルなの分かる。

それをやられてもクトの顔からそのちよつと狂ったような笑みは消えない。逆に愉しんでいるように見える。というか実際楽しんでる。つうか、コイツを早く止めろ。

心浄「まだ、行くぞ。こういうのをなんていうんだっけな…ああ、そうだ…：俺のバトルフェイズはまだ終了してないぜ」

感情の起伏や声のトーンが絶対的に変わらない為、ただ真顔で変なポーズをやられても白けるだけなのだが、本人は結構マジである。

心浄「スペル発動。悲哀『変わらない物語』 擬愛『偽りの家族愛』 親愛『兄妹の打ち上げ花火』」

クト「イイじゃん！いいジャン!! スペルカードルール初心者にしては中々イイの撃ってくるねえい！」

いや、何勝手に盛り上がってんだよ。と周りはツツコミたい。というか、心浄は完全に遊ばれている。

一応彼の思い出から造形した初めての弾幕なのだが、クトにはまだまだ甘いお子ちゃまの弾幕のようだ。

つうか、心浄はスペルカードルールというものを知らない。お陰で大事な時に使うスペルカードをバンバン打っている。

その光景を眺めて一言。

銅「……………片付けしてから二次会行かね？」

ほぼ全員『さんせーい!』

全神王『じゃあ、パチツとな』

指を鳴らすと会場は元通りになった。

空いた天井は塞ぎ込んでおり、散らかっていたテーブルや食べ物は綺麗さっぱり無くなって、新しく食べ物やら何やらが揃った会場が出来上がった。

因みに、クトや心浄の熱いバトルは外で行われおり、心浄が丁度手厚いカウンターを食らっている最中なのだが、割愛する。(心浄&amp;mp;クト『!?!』)



というか、最初からお前やれよ……という人物がほど居るのだが……。〈全神王、十夢来、ルミア、土方、ハテナ、干那、稀星〉

これは彼らの強さが規格外という言葉さえ生温いほどの単純な強さを秘めているので、物語の面白さが欠けるといふものだ。

いや、だって最初のあの乱闘だって、小惑星襲来した時だって指パッチンすれば終わりとかそういう奴らなんですよ？つまんねえなこの小説……という事になるので許してください……。

銅「……やつと終わったのか……」

宮「ああ……やつとな……」

咲夜「……ここまで精神的に疲れたのは300年生きて中で初です……」

久留蛾& amp ;神奈「え、そんなお歳なんですk……」

見事に2人の脳天にナイフが刺さった。これは100点をあげたい。

この2人は時々無神経になるのがいけない。

稀星「蓮くん……私、あなた（の全て）が欲しい……」（紅潮した顔で）

蓮「え、ええ……」（困惑と歓喜）

刀神「このみんなが一言言つて締めるつていう手法もう数多の小説読んでる読者の人たちにとつてはつまらない事なんじゃn……」

作者「お前黙つとけよ！いいんだよ。もう正直に、オチなんてなかった……つていう終わり方にしたかつたんだよ!!」

ハテナ（結局……私つて何しにきたんだろうなあ……あ、このクツキー美味しい……咲夜さんに教えてもらおつか……ねえ、貴方達もそう思わない？）

干那（これ、本当に私が来た意味あつたかしら？……ハア……あの全神王とかいう奴……絶対殴つておかないと気が済まないわ……）

メリオダス「なんか、飯だけで争つてるつて随分テンプレな事しちまつたなあ……」

転生神「無駄な事が嫌いな自分が何故あそこまで熱くなつたのか……未だにわからん」

ゼノ「……我らの出番は無しか……」

shupy「仕方ないわ。私たちはストツパーなんて役割だけど、私は最弱、貴方も強いとはいえ、他の連中とは世界が違うわ」

ブロリー「この飯ウマイイなあ……おい！……その姉ちゃん！もつと食わせロツトおお!!」

咲夜「かしこまりました」

悟星「あ！そこのおねえさん！俺にも頼む！あと横のコイツにも！」

神威「ガツガツガツガツ！」

悟星「お前中々良い食いっぷりするなあ…見てて気持ちいいぞ」

さつきまで敵対してたやつが発言なのかそれは？

というかこの小説の奴らはどんな精神してんだ？もう全員がさつきのまでの事無かつたことにしてるぞ？

クズロット・ヘタレベジータ・パラガス「……………」（彼らはまたブロリーの飯ぶん取ろうとしてデデン☆されました。親父イ…は完全に巻き込まれただけです）

ピッコロ「……………」

作者「アレ？何も喋らないの？あんま喋ってないじゃん」

ピッコロ「フン。用が終わったのなら、俺はもう帰るぞ」

作者「ま、後で強制的に呼ぶからねえ……………じゃあ、また後で」

いや、待て帰る手段は？と、思う方もいらつしやるだろうが、安心して下さい。（使いた古されたネタ）作者権限で本当に帰った事になります。

土方「なーんか寝ている間に全部終わっていたな…」

ルミア「一年近く眠っていた気分だ……………」

影楼「…遅いぞお前ら」

旅人「なあ、俺の扱いこの中で一番酷くねえか？俺って一応コラボキャラだよな？戦闘描写もギャグ描写も微妙なものばっかりなんだけど？」

いや、それならクトとか心浄の方がラストの扱いはひどかったと言えるぞ？いやまあ、確かにコラボキャラにしては全員不遇と言えるが……。主にゴミクズカス作者の所為で……。

十夢来「おい、作者」

作者「ん？どしたん？」

十夢来「『クリスマスマス企画だよ！全員集合！！設定集？』の時、最後に出雲東ってキャラ居たよな？それに呼び出し話にも居なかつた干那って言うキャラやハテナってキャラの突然の導入…しかも俺たちの小説の中で1人の主人公役の悲哀静寂ってキャラが居

ない事…あと、設定集？の時の孫悟飯も紹介されたが此処に居ないこと……これらのはどういいう事だ？」

作者「あ……う、うん。その事なだけどさ……。ハテナの突然の導入は、私がいっもお世話になつてゐる『オールオーエム様』からの案でさ、キャラクターを気に入つたからつていう理由だったとも思う。もう一年以上前に決めた理由だからうろ覚えで……。ごめんなさい。因みに全神王が連れてきたつていう裏事情があります。

悲哀くんは……今更になつて読み返してみたらがつつり居ましたね。つて事で完璧に忘れてました……。悟飯くんは今回のクリスマスパーティーには完全に参加しない予定でした。ただ、これから出番があるので軽い紹介を……という意図で掲載しました。出雲東さんも同様の理由です。読者の皆様に多大なる迷惑を掛けたことを心より謝罪します……」

十夢来「……お前本当にダメ作者だな。もう応募あつた人達全員参加させろよ……」

作者「はい……。元々始めたばかりのルーキーだった私にあそこまでキャラクター案を出してくれた方々には全員採用するつもりでした。今此処で宣言しておきますが『活動報告にて送つて頂いたキャラクター案は全て採用します』一年近く待たせてしまい本当に申し訳ありませんでした……」

## 本編

## 本編？

「私！ふつかああつ!!」

「うるさいよ」ゴン！

「イツテエ!？」

「左に名前の表記無いんだからさ。誰なのか言えよ。しかも復活でもなんでも無いだろ」

「チツキショー……ここでも好きにおっぱじめようと思ったのに……」

「何おっぱじめようとしてたんだよ……あ、どうも土方です」

「クケケ！私は見ての通りクトだ！」

土方「いや、文しか見えねえだろ」

クト「……この作者はメタ発言が好きなのか？」

土方「あんまりシリアス感出したくないからギャグ要素多めにしてんだってよ」

クト「ほむほむ。そーんで、今回はなんのようなかね？」

土方「いや、ただ単に物語が進む……っと言っても確かにそれっぽく進んでいくが、大

体は日常短編コメディの形で進んでいくからなあ……ウチの主人公達が大体その世界からすると最強的扱いにしてるから……異変起きてもすぐ終わっちゃうからなあ……いやまあ、そこは何とかして面白み出すが……」

クト「馬鹿だねえ……アンタら。完成された強さを持つキャラクターなんてバトル漫画にとつても何にとつても最悪手だぜ？なあーんの面白みも無くなるからねえ」

土方「だよなあ……なんでウチの作者つて最強！とかチートやろう!!とかにこだわんだろうなあ？」

クト「知りやあしないうつての」

土方「取り敢えず、本編に進むか」

クト「およ？そろそろ幻想入りかい？」

土方「新しい世界軸でのな」

クト「クツケケケ！今度はどんな連中が居るかネエ！」

土方「そんな変わらねえよ。全神王が本来の世界軸と近い奴だつて言つてたからなあ」

クト「そりや残念……でも異常イにおかしい奴レらは居るんだろオお？」

土方「ああ、ゴロゴロとな。正直、幻想郷の主な登場人物の全員合わせた数の5分の1ぐらいは居るんじゃないかねえか？しかも全員世界の1億や2億は簡単に壊せる奴らだし」

??? 「それってもう東方Projectっていう作品の範疇に収まるのか？」

クト「おんや？ アンタ誰や？」

??? 「つと、自己紹介してなかったな。我が名は十夢来<sup>トムラ</sup>！ ゆんゆんの夫にして最強の超越者なる者!!」

クト「クツケケケケ!! 早速面白い奴が来たじやないの！ それじやあ答えて上げるのが世の情け！ ってねエ！ 我が名はクト！ 最つ狂で最つ凶なイキツタクソ野郎さ！」

十夢来「おおー。流石全神王が言うだけあるなあ。ノリが完璧じゃん」

土方「十夢来か……つかなんで紅魔族特有の挨拶の仕方した？ お前日本人のまんまだろ？」

十夢来「いや、俺もう紅魔族の里に住んでるし」

土方「……え………童貞………だよな？ もう奥さんとヤツてるとか………ないよな？」

静かにそう尋ねてみると、十夢来は何も言わずにグーにしていた拳をゆつくりとチョキに変えた。

それを見たクトが爆笑。土方は肘をぶつけた。哀れ土方、そのまま死ねば作品が多少は書きやすくなったのに。なんで死ななかつたんだ。

土方「誰が死ぬかあー!!? つか膝から崩れ落ちるんじやねえのかよ!?! 何で肘から!?! 何



故肘から!?つかトムラお前何嫁(13歳)にしてんだよ!!」

クト「クク：クケツケ：クケケケケケケケ!!アンタたちの小説って地の文の声も聞き取れんだねえ!クケツケツケ!」

土方「そんな笑うなよお!つか何で死ぬなんて言ってくんだよ：俺死なねえ体だろ：つかこの身体作ったのお前だろ：」

さあ?何のことでしようね?

というか、地の文にいちやんモンつけてくるんじゃないよ。

土方「つけるわ!!メタ発言多めの低次元ギャグコメディ小説なんだから地の文読むとぐらいいたり前だろうが!ほほ100パー悪いのお前だし!」

十夢来「：：：そういやルミアと干那、ラグエル：：：じゃなくて友禍、雷牙、蓮に旅人と東、ラルア、メーシヨン・エクスクラ、スイプレコルナ、ターマ・クーダ、メルトナ・ムイラス、純銀すみしろがね、閃、狗灰デスク、机デスク、  
ラヴァーは?」

『(発音可能だが理解不能言語)、

色々と面倒くさい展開になりかけて来たので大分強引な話題転換をして来た十夢来、きつと奥さんとの喧嘩に弱いに違いない。

十夢来「……………」(凶星過ぎて何も言えない)(奥さん天使過ぎるから怒られてても天使に見えててそんな怒られてる意識はなかった)

土方「……現状況コラボキャラの名前紹介ありがとよ。因みに全員大人の事情とやらで居ない。因みに結局は全員こういう回に来るぞ。あ、コラボではないが、スネークとカズが参戦するからな」

釈然としない表情で礼を言うが……明らかに顔が不機嫌です!と主張している。そんな顔してていいのだろうか? 人気投票の時に差が出るぞ?

土方「うるせえ!つかそんなにこの小説続けられんのか!?!作者!?!」

作者「それは知らん」

「「クズだな」」

作者「酷過ぎない!?!」

十夢来「前例あるだろ前例。しかも自分で作ったキャラ忘れてるし」

作者「ぐつふう!?!」

作者の胸に矢印の様な何か突き刺さる様な幻影が見えたが気のせいだろう。鬼滅の矢琶羽がいるまでも無いのに。

作者「地の文まで俺の事粗末に扱うの!?!」

土方「取り敢えず作者の扱いは後の事にして、このメタ回を早く終わらせよう。本編

行かなきゃな…ただでさえ待たせてるって言うのに…」

作者（え、私の事は放置!?)

クト「終わりって言ったら終わりなんじゃないの？」

土方「まあ、見なくても、見てもいい薄っぺらい回だからな…多分それで終わるぞ」

クト「じゃあ、終わり!!」



何十人として突然現れたらどうなるのだろうか？

きつと捏造新聞記者が聞けばすぐ様飛び掛かる案件だろう。

因みに、ここに居る4人の他にも幻想入りしてきた者達は居る。

「……………何故だか夢を見ていた気がする……………ソファから落ちる夢……………落ちた瞬間目を覚ましたけど……………所で此処は？神社か？」

1人は抽選の結果が良かったのか比較的安全な、貧乏という言葉だけで想像ついてしまふ巫女の神社前に幻想入りして居たり。

「あ、良かったあ……………近くにこんなおつきい館なんてあつて！でもなんでこんな紅いんだろう……………いやでも本当に良かったあ……………急に野宿つて……………女子高生がするのじゃないよね……………」

1人は本来の世界線とは違った本来なら居るはずのない3人目の吸血鬼の姉妹が住んでいる紅い館に流れ着いて……………。

「ひ、向日葵？うわあ……………此処まで広がってるの見たことが無いなあ……………写真でも1枚ぐらいは撮りたくなくなっちゃうね……………ん？幻想郷の向日葵畑？」

1人なんか大凶引いているが、これ大丈夫なんだろうか？いやまあ、夜ならとにかく逃げろの一つしか言えないが、今は太陽が昇り始めてから随分とたつたころだ……正午は近い。

転生者の様子が激変するのはそれから間も無くのことだった。

「へー、此処が地底か……鬼つてやつと戦うのは初めてだなあ……」

なんかもう持ち前のセンスかなんかで状況を把握して、戦闘狂な性格が元と連結してかヤバイ発言言っている奴が居たりと……結構、まあ……うん。

コイツら転生者か？と思ってしまう。なんでそんな気分早く変えられるんだよと言いがかりをつけてもおかしく無いと思う。

しかし、これは（低次元）ギャグコメディ小説だ。

ツツコミ役はまだ登場しない……。

早くなんとかして！正直面白さが成り立たなくn……！

☆

とあるどつかの天空で、何十人という人物たちがその空に浮かび上がっていた。そしてその前に立ち一人大きく宣言する者がいた。

『さあさあ皆さん！いらして頂き有難うね！今日から君たちには此処でサバイバル生活してもらおうヨ！因みに！しばらくの間は世界跳躍、転移、時間逆行、世界崩壊などによって元の世界に戻ることが出来ないからネ！俺の能力で封じられてる十急激に力的大幅弱体化喰らうから注意！……まあ、それでも君たちは常軌を逸してる存在……不可説不可説転が1という……無理やり壊した場合……わっち自らアンタラをシユクセイシニイクカラナ？まあ、移動したとしても結局はこの世界に逆戻りさ！あはははは！それでは！転移させる先では良い旅を！行ってらっ……ブハハハハハハハ!!……ああ！ごめんごめん！いつもの調子で精神がちよっと入れ替わっちゃってねえ！ブハハハハハハハハ！ベベヘヘヘヘ！意味も分ならず笑う状態になっちゃったから！もう転移させちゃうわ☆グツバアイ！』

十夢来「何コラボ相手にしてんだお前。コラボ相手全員引いてたぞ……」

全神王『我を愚弄するか？単に人間が思いついた程度の意識で生まれた低次元の存在が？』

十夢来「お前のその口調と性格の変わり様何なんだよ」

全神王『コラボする際、コラボする相手が書きやすい様に色々な性格混ぜたってんのよ』  
十夢来「本当は？」

全神王『昔の作者がこんなキャラってかつこよくね？とか厨二病心で思いついただけです』

十夢来「……くだらねえな」

全神王『でしょー？マジウケるわー！ほんとアイツって学習しないわよねえ！』

十夢来「ところで…今回のコラボ相手はそれぞれどこらへんに飛んだんだ？因みにお前に拒否権なてないからな。…まず『アールオーエム』さんからのキャラにするか。ハテナさんは今何処にいる？」

全神王『ハテナちゃんは…人里離れた適当な森…だね。正直、彼女は何処に配属しても同じような結果になると思ったからねえ……。彼女は自分が『終わる』事を何より望



んでいるけれど…彼女自身能力扱えてないじゃあねえ…サハラ砂漠の中で一粒の砂を探す……のは簡単だな……そうだな…人間がTASさんになれるぐらいの……難易度……んー、これもまだ簡単な方だな…一般人が俺を本当の意味で殺せるぐらいの難易度かな？

あと彼女にとつちや、そこら辺のチート野郎なんて、ちよつと強い程度だからね。扱いに困った。まあ、彼女自身の『終わる』事に関しては私とお前どちらでも簡単に終わらせられるケドネ。でもそれじゃあ物語は何も面白く無い、ただ一人の……いや彼女は『個にして万の軍勢』か……何万の中の一人の願いを叶えたとして…それが誰かに知らなければ…ね。面白く無いだろう？あと、彼女なら多分すぐに人里に住み込む事だろうぜ。そう言う能力……とか体質持つてるやつも中にはいるだろう。因みに、サブ案は白玉楼だったけど彼女の場合なんか他の魂と混ざりそうだったんでやめました！幽々子さん消えちやう！』

十夢来「…お前を一般人が殺すなんてどんな難易度だよ…。まあいい、ハテナさんの位置はわかった、それと経緯。次、メーシヨンさんは？」

全神王『何処かの森。彼女にはちよつと火種になつてもらおうと思つてね…。ハテナちゃんと出会つたんならそれはそれで面白そうだよね！アハハ！』

十夢来「急に雑になつてないか？」

全神王『ウフフ。彼女つて生物の原点とも言つていいのかしら？だから森にしたのよ。いずれはクリーチャー化した動物たちと彼女がハテナちゃんとバトリそうじゃない？』

十夢来「いや、二人は互いに：じやないが、一方が片方に対して不干渉存在だろ」

全神王『白玉楼送つても良かったよね！魂とか食べ尽くしちゃう可能性あるけど！』

十夢来「：（話聞けよ）：洒落にならないぞ：幽々子ファンや妖夢ファンに怒られるぞ。つか魄だから魂には干渉出来ないだろ（2回目）」

全神王『そこは自重するさ。それに森と言つても守矢神社の近くさ』

十夢来「そうなのかい。（裏声）……で、その彼女たちは今どうだ？」

全神王『んー、今は2人……というか参加者全員ポカーンとしてるね！あ、ハテナちゃん動き出した！』

無視である。この神、そこそこ人気な常闇妖怪の代名詞とも言える言葉を完全に無視したのである。

ちよつとだけでも笑い取ろうとした十夢来が馬鹿みたいではないか。完全な声真似だつてしたのに。まあ、もう使い古されてるネタなので正直やつても、『あ、ルーミアのセリフだ』程度の印象しか残せないのだが。

まあ、それはさておき、十夢来はハテナの動向が気になり、半分ハテナになった。

十夢来『レギオンの1人がハテナさんに『取り敢えず周り探索してみれば良くね?』と言い出したらしい…ふむ…え、待つてハテナさん凄いな…いつもこんな入り混じった会話を聞いてんの?よく狂わないな…いや狂えないのか。あ、スレが変わった。…いやハテナさんコレをセクハラで訴えないのか…いや訴えれないのか…ちよつとこの悪霊放り出そうかな…ハテナさん可哀想に思えてきた…』

全神王『おいおい、ハテナちゃんになつてんじやないよ!つか、どんな会話聞いてんのよ!』

十夢来「ちよつと気になれば勝手に聞こえるだろ、お前は。自分で聞けよ」

全神王『意地悪う〜!』

十夢来「…ハテナさん苦労人だなあ…いや、だから終わらせたいんだろうな…色々…よし次、『スイプレコルナ』さんと『ターマ・グーダ』さんは?」

全神王『彼女たちはたしかにコラボ相手だが私が飛ばした訳ではない…完全なる迷い人だよ。スイプレコルナちゃんは今は有頂天でぐつすり眠ってるね。コレは写真に残しとかなないと損だね!ターマ・グーダちゃんは香霖堂近くに居るよ!河童の連中の所でも良かったけれど、先にパイプ作つとかないとネ!コレで技術チートを目指そうぜ!』

十夢来「何だその最速を目指して走るとある走者みたいな言い方は……。まあ次に進んで行こう。『メルトナ・ムイラス』さんは？」

全神王『いや彼女って迷い込みでも何でもなくて自分でこつちの世界来ちゃったからね…今は幻想郷に実質的な姿は表していないけど、どこらへんにでも居るぜ？ 幻想郷に溶け込んだしまったからなあ。って、お前も融けんなヨ』

十夢来「どこに居るのか知らないと気が済まない主義なんだ…」

全神王『ヴァナータにそんな主義ないでちよ？』

十夢来「ああ、無い。単なる興味本位で解けこんだ」

全神王『後で嫁さんに「女性の住居に勝手に入り込んで位置特定したぜ」って言っとこうか？』

十夢来「ハイ！ しませんでした！ 何でもしますのでそれだけは勘弁してください！！」

全神王『嫁関わりと弱いつてのが人間の不便な所だよねえ…』

十夢来「ウチの嫁をバカにすんなよ…？」

全神王『いやバカにしてもこちらのメリットが俺の心の保養程度にしかならないよん？』

十夢来「……あんじゃねえかメリット。テメエ殺すぞ」

全神王『ハツハツハ!!随分嫁バカになつて…(ブチ)』

ぼとりと地面に何かが落ちた…その細長い物体は原型を留めておらず、何かを撒き散らしているだけだ…。たちまち鉄臭い匂いが充満していった。鼻腔を刺激するその香りに何も反応を示さない2人が異様に見えた。

全神王の腕はもう既にあるが、腕の部分に布は既になく、千切れた際に飛び散った血が服を染めて行く……。

今だに十夢来の表情はR18G規制を掛けたくなるぐらいには怖い。並の人間なら顔見て死んでる。

全神王『うんうん!これぐらいやんなくちやあね!やつてらんないよねー!つかそれコラボ相手にやんなよー?』

十夢来「細胞全てを殺して自然治癒能力…及び回復系能力、体質、不死も全て解除してから千切った筈なんだがなあ…:…:…:何で腕を生やしてんだ。それで、何で表情何も歪まないんだよ。痛覚何倍にしたと思つてんだ。痛覚遮断してたとしても無理やり痛むようにしたんだぞ?どうなつてんだテメエの体。一度永琳先生にでも見せた方がいいんじゃないやねえか?」

何故嫁が絡むとバーサーカーな安本丹に成り果てるんだろうかこの馬鹿は。

一回さとり様の所でカウセリング受けた方がよろしいのではないだろうか?いやま

あ、そうした場合彼女の負担がとんでもないことになるのでやっぱりしないで。可愛いを守るのは我々日本人の使命である。

全神王『あヒヒ！甘いぜ十夢来君！不死になんて不完全な存在になつてゐるわけなしよ！それにい！そんな甘いやり方で腕を失う訳ないじゃないですかー！かつこわらい。んー、俺の腕を千切つたのは君の能力の攻撃性が上がったのかな？そこは揉めてつかわそう！どうだい？この腕を持ち帰つてごらん？そこらの幸運の女神が側にいるよりも運が良くなるよ！』

十夢来「いらん。次だ。脚ダセや」

全神王『おいおい、そこは首だろう？』

何で自ら急所を提示していくんだろ。因みにコイツ、全神王『弱点を増やしてその弱点を突かれた場合、受けるダメージ量が生きた年の数程倍になる』というデメリット能力もある。いやまあ不思議な能力あるんだからそういう能力もあるだろう。

因みにコイツ全神王の生きた年数は宇宙が誕生するより遙か前と言っておく。

### 閑話休題

なんかかんやで精神汚染系能力使い始めた辺りから話がまとまらなくなつた為、無理矢理話を進めることになりました（by 作者）

十夢来「……んで、今純銀 閃さんは?どこに居る?」

全神王『閃ちゃんは……あ……ちよw面白い展開になつてきたw彼女も流れ者なんだけどさ!俺が転生させたちよつと特別な神威と戦つてるわw』

十夢来「ハアツ!?もう戦つてんのかよ!?!……待て、確かその神威の転生者の転生場所つて地底だよな?」

全神王『おん。そうだよん?』

十夢来「あの勇儀とか萃香か参加したらどうすんだオメエ!?作者ただでさえまともな戦闘描写なんて書いた事無いんだぞ!もつと投稿遅れるだろ!!何してんだアイツら!」

全神王『クカツカツカツカ!大丈夫ですゼイ十夢来の旦那さんよお』

十夢来「お前が言うこと全て胡散臭く感じる去年の夏頃……期待していいのかその神と  
いう悪魔の囁きは……」

全神王『どうせそのシーンは使われないんだk……おつと、無理矢理俺様の口を閉じようとしたなあ?』

おい。メタ発言しようとした瞬間にキャラが突然の意識不明の状態になるお約束どころ行つたんだよ。

十夢来「そんな常識コイツに通用しねえだろ」

……そうだな……。いや待て、この地の文も呆れさせるほどの非常識つて一体何?

十夢来「全神王って奴は非常識っていう薄っぺらい言葉で収まるような奴じゃねえかな。……まあ……昆布でも食うか？」

……なんで地の文相手に普通に対話してるんだろうこの人……（地の文の妹）

全神王『さーてーと。他にも聴くかい？十夢来くうーん？』

十夢来「聴くに決まってるんだろ。『アールオーエム』さんのキャラは粗方終わったしな……『カリーシュ』さんのクトや、『ブルーレット スカーレット』さんのルミアはどうした？』

全神王『そこにいるぜえ？』

十夢来「あ、ほんとだ」

指を指した方向に顔を向ければ確かに見覚えのある姿が2人いた。

なんか、今までずっとそこにいたぜ？みたいな雰囲気成全神王が醸し出してるが、2人はまだ状況を飲み込めていない様子だった。明らかに急に転移されたような表情だった。

十夢来「……って騙されねえからな。絶対今呼んだら」

その言葉を全神王に向ければただ遜色なく張り付いた笑みを浮かべるだけだ。気持ち悪い。

全神王『直球すぎやしねえかねえ？地の文様よお……』



ルミア「……なんで二回も連続して転移を無理やりされなきゃいけないんだ？」  
至極当然の事をルミアは言う。

なんで他人の都合で訳の分からない場所ーいや幻想郷は彼自身なのだがーに二度も移動させられなきゃならんのか。これはコラボキャラの扱いとしてあっているのか？いや、ある意味では合ってるんだらう。

クト「わたしや面白い方に来れたから別にいいけどね！クケケケケ！」

「お前やつぱ狂ってんぞ」「せめて不満言えよ」「こんな禄でもない神に意味不明な場所に転移させられたんだぞ？」と、十夢来とルミアは思った。いやでも仕方の無い事でもあるのだ。それは彼女のポテンシャルのなにかを失う事だからと言つてもいい。

十夢来「……そーいや土方の奴は？」

全神王『ん？アイツ？ああ、今回の話には出てこねえから存在抹消されてるぜ？』

ルミア・十夢来「……」

何も言えなかつた。

同じチート転生者なのにどうしてこんなにも扱い違うのだろう。ルミアとライバル的存在がこうも適当に扱われていいものか？いや、いい筈がない。まあ、そんな事情全神王にとっては知らないのだが。

ルミア「なあ、俺たちがここに呼び出された理由はなんなんだ？」

全神王『いんや？特に理由なんてないぜ？ただ単純に面白そうだったから連れてきただけだよ』

ルミア「」

クト「クケケケ！そりやまた大層な扱いで！」

ルミアは激怒した。この傍若無人で身勝手すぎる上司に。先輩の神必ずやこの分身体を6垓体くらいはぶつ殺すと……。まあ一体も無理なのだが。

まあ、この上司はいつもこんな感じだったな。とすぐに落ち着き取り戻し、取り敢えず全神王の腕ぐらいは千切つてあとは放置した。

また鮮血が舞い、辺りに夥しい血液が広がる。

4人は何も気にしない。いや、一番狂つてるクトだけが内心ギョツとしてたりしてるが。これが彼らの戯れあいである。

十夢来「……………ハア……………」。ルミア、後でコイツをどう殺すか考えよう。今はとにかく、他の転生者が何処にいるか紹介しなくちゃならない」

ルミア「ついに言ったな。本当ならお前自身が語って終わりだったそれをついにお前は言ったな？」

十夢来「うっせ。もう話が進まな過ぎて作者もどうしていいか分かってねえんだよ」

クト「じゃあ！私が紹介してしんぜよう！『黒いサクマ』<sup>路道</sup>とか言う奴から来たキャラはええと？……ああ！蓮君さんか！それにあの旅人とか言う奴も居るじゃん。出雲東つて奴は会ったこたあネエデスけど。彼らは……？ほむほむ。蓮君さんが紫の家に住んでてえ……あ、紅魔館でバイトしてるつていう設定ね。旅人つて野郎はあ。白玉楼で妖夢にべた惚れかよ……。子供は出来んのかね!？」

ルミア「知るかよ。つか、妖夢に彼氏なんていたのか。まあ後で幽々子に酒でも……いやアイツの場合飯の方が得策か……」

十夢来「東の奴は……ああ……今、人里で忍術芸おつ広げてんな。完全に子供達の人気キャラクターになつてる。まあ、……コイツは完膚なきまでのギャグキャラだからな……つか、この3人は元から住んでるつていう設定なのか……」

クト「設定とか言うんじやないよ！全く！ここの小説はメタ発言ばかりしやがって！次どんな反応すればいいのか困るダルオオ!!」

お前が先にキャラ崩壊してどうする！お前が一番精神的には強いはずだろ!？」

ルミア「もう遅いことだと思っぜ？」

そういう反応はないんじやねえんですかねえ……ルミアさあん……。

全神王『オイオイ。説明役の妾の存在価値がないに等しいではないか……寂しいゾ……』

お前は黙つてろよ。

十夢来「もう地の文でも会話に参加してるじゃねえか。混沌過ぎるぞ」

全神王『それがこの小説の売りよ!!』

ルミア「安っぽい。絶対に売れないなそれ」

クト「こればかりは激しく同意する」

全神王『んー、収集つかなくなるってのは大変だあゝね。もう君たちの反応なんていらねえから。俺がどンドン説明してくわ。って事で静かにしてろよk s共』

十夢来「急に口が汚くなったな」

クト「これにや私もビツクリだぜ！まさか呼び出されて少し騒いだら黙れk sと言われるとはなあ！寛大なクトさんもこれは怒っちゃう！って事で爆破『魔力暴走』！」

瞬間、クトからとてつもない光と共に荒れ狂う魔力が放出された。

辺りには土埃や砂煙などが空中にいるはずなのに舞い、辺りを汚した。

だんだんと砂煙が晴れてくると……。

ルミア「……早速収集つかなくなってるじゃねえか」

無傷の3人がそこにいた。

クト「私のマダンテが効かない！なんてこつた！ウチの作者もこれで一回死んだのに！クトは5の精神ダメージを受けた！」

十夢来「いや、一応キイテルキイテル。主に何か空気震えてんなって思うぐらいにや

あな」

クト「そりや聞いてないって事じゃあないか！」

ルミア「まあ、俺は魔法概念を操って魔法ダメージ失くしたしな。十夢来は元々お前自身だから、お前がマダンテ自分で放って平気なんだから十夢来も平気なんだよ。感覚共有に似て非なるアレだ」

クト「クー！チート転生者共めえ！」

全神王 《『【（おい）】』》

ねはんじやくじょう  
涅槃寂静……幻想郷の住人……いや、不可説不可説転以上……いや……無限と言って良いだろう。

無限にある世界線……時間軸……の全ての銀河……宇宙……本当の意味での『全て』の生物……いや、そもそも形取っている『原子』が……一個たりとて余す事なく恐怖、畏怖、戦慄……定かではないが……確実にその機能を一瞬のみだが停止させた……。

十・ル・ク「……」

全神王『ああ、クトちゃんは騒いででも良いぜ？にしても少し騒ぎ過ぎたテメエらが悪いけどねん？』

十夢来「クトだけは許すのな。美少女だからか？見た目だけたら美少女だからか？」

クト「おいちよつと待て。私が見た目だけいい女にしか見えんのかい!？」

ルミア「事実だろ」

クト「あ、？」

全神王『ワオ。さすがの我もビックリなのじゃ。ここまで妾の話を聞かない馬鹿共はテメエらだけだわこんちくしょうめ』

十夢来「えー、全神王に変わりました。十夢来がお送りします。『現実と幻想の境目の住人』さんから、『詠禍 干那』さんとラグエル……もとい『蒼空 友禍』の現在位置は……まあ干那さんは魔法の森の片隅でひっそりと暮らしてますね。正直あの人ちよつと苦手……「お前自身だろ」だまらっしゃい。それと友禍の奴は……天司だからか有頂天に居ますね……うん。……全神王……お前が連れてきた人だよな……完全に迷い人って感じじゃないぞ」

クト「ごめん。その感じってどの感じかって初心者に分かりやすく十文字以内で教えて？」

十夢来「てんかいよめてるひと」

ルミア「展開読めてそうな顔してるからって……ああ、でも本当だ。博麗大結界の綻びみてえのがねえわ……完全に全神王が手引きしたな」

全神王『あら？バレちやつた？そうなんです！彼女がお暇にしてたからね！ちよいと面白そうなんで連れてきちゃいました！』

ルミア「紫や霊夢の苦勞が知れるな……今度胃薬渡しとくか……」

十夢来「可哀想だなおい……。俺たちみたいな作者がポツと出で思い浮かべた薄っぺらい設定の存在が明らかに格上の濃い設定してる人達を悩ませるとはな……」

全神王『いやいや、結構練ってる場合もあるぜ？』

十夢来「お前や俺は薄いだろ設定が」

全神王『こりや手厳しい』

いや、またメタ発言すんなよ。逆にクトがもうメタ発言放っておいていいかななんて放心し始めたぞ。

全神王『ま、そろそろこのキャラの現在位置紹介のコーナーも終わりそうだねえ。よし！早めに終わらせて早めにキャラ達の関わり合いを見に行こうぜ！って事で『ホワイト・ラム』さんの狗灰いぬはい机でくん！この子は妖怪の山……天狗の里から離れたところに元々住んでたっていう設定だよ！今は俺が攫って来ちゃったスネークやカズを介抱してん

ね！詳細は今後の話を待ってね！』

十夢来「え、お前攫つてきたのかよ!？」

クト「……伝説の英雄が可哀想だぜ……」

ルミア「紫がたまーに性欲処理で人を攫つてるとは聞いていたが……お前の場合完全な愉快犯だな」

クト「うえ!?!私初耳なんですけどー!?!クオレ→は後で紫に問い詰めなきやいけませんねえ……」

全神王『ハイハイはい！皆さん静かにしてねー！紹介出来なくなるからー!……えー、『紅魔』ラルア@黒き悪魔』さんより！ラルア・スカーレットちゃんの参戦！いやー吸血鬼姉妹の未っ子にてフランドールと同じような存在……もうフランドールと似てるキャラが二体いるって時点でわっけワカンねえな』

クト「クケツケツケ！フランちゃん人気なのよ！当たり前前ダルオ!!？」

ルミア「お兄様お兄様っていつもしつこいと思っただけだな……まあ可愛いが」  
十夢来「ツンデレかよ」

全神王『需要なんて皆無だぜ?……『SOUR』さんからのお便りですわ。えー』

『(発音可能だが理解不能言語(因みにここにいる奴らは大体理解してる))もと  
い、龍さんとラヴァーちゃんの参戦！龍くんは強いぜえ？こりや何個世界壊れるか楽し



みだナ！因みに場所は魔法の森の干那宅近くだぜ！』

ルミア「さりげなくキャラ紹介したな」

十夢来「そして、コラボキャラにコラボキャラをぶつけるといふ事をサラツと言いやがったな」

クト「んん？実際私やルミアもそんな感じじゃないのかい？」

十夢来「いや、一応、お前たちは企画の時に面識はあるだろ」

クト「ほむほむ。成る程成る程」

全神王『これで一通りは終わったねえ……。ここからガチのメタ発言をするんだが、感想で設定言ってくれた人たちもいるから後2人存在するんですが……。ちよつとキャラが多すぎてねえ……。自分で募集したのに無理やり参加させたもんだから今後の展開がとんでもない事になってんのよ』

十夢来「なので2人の所在はまた後で判明することになりました。一応全神王がもう転移させてあるから何か参戦してるっ!? ってなります……。つてオイ。作者ア！俺の言葉を手勝手に操るんじゃないか!!」

クト「ああ、作者がアンタを乗っ取ってたのか」

ルミア「ギャグ補正が働くとチート野郎どもも弱くなるもんだ……。まあ龍つて奴はその補正を無効化するらしいが……。俺の闇を払ってくれんのかねえ?」

全神王『ハツハツハ！そんな簡単にお前の闇がぬぐい切れる訳ねえだろう！因果律操作なら別だけどネ！』

ルミア「おいやめろ。俺の意味がなくなるだろ」

全神王『途端に弱みを見せんのね君は、自分で自分を救えるのに』

ルミア「ほつとけ。アンタの手は借りない」

クト「え、なになに？2人の間に何があつたの？」

ルミア「こればかりは言えねえな…」

十夢来「まあ、良いじゃねえか。今回はこれで終わりだ。だんだんコラボで明かされてくんだろ設定とかなんとか」

クト「またメタ発言を言ったな！安っほいぞ！」

十夢来「ほつとけ。大体、お前も後書きとかでそういうの言ってただろ」

ルミア「いや、本当に安っほくなるからやめとけよ」

十夢来「…………善処する…………作者が」

いや、待つてそれってこの小説のメタ回の存亡の危機が…………！

## 落ちてった4人の場合

「ヤバイヤバイヤバイ!!」

「落ちてる落ちてる落ちてる!!」

「あのクソ神やっぱクソ神特有のお約束を忘れてないな!!」

「そんなお約束なんてもう古臭いんだよ!!せめてマグマの中にしろや!!?」

「お前すげえ事口走ってんぞ」

「ウルセエ!!これで死んだらあのクソ神を呪い殺してやらああ!!!」

「お前すげえ事口走ってんぞ(2回目)」

「兄貴!俺の踏み台になってくれ!!」

「お前すげえ事言ってんぞ(3回目)」

「しっけえ!!」

「つか、その顔で焦るな!フリーザ様の顔がとんでもない事になってる!!」

「ハッ!?何で気づかなかったんだ!?!」

「いや、もうヤバイ!地面が近づいて来てる!あと10秒で俺たち死んじゃう!」

「そんな空間把握能力高かったっけお前!?!」

「いや、俺たち兄弟の中にそこまで大した能力持つてるやつなんて早々にいないだろ」  
「ごめん。この馬鹿兄貴たちが何でこんな冷静なのか見当もつかないんですが、誰か説  
明プリーズ」

「いや、待ってもう時間がn…」

ゴスツ！

そんな鈍い音が四連続で響いた。

その音の所為でか羽を休めていた小鳥やら虫が統率も取れぬまま散り散りになり、や  
がてそこは静寂に包まれた……。

さて、最初っからなんか概要が掴めそうに無い頭の悪い会話を繰り広げていた悟空  
(仮)、ベジータ(仮)、ブロリー(仮)、フリーザ(爆)。

彼等は全神王によって転生させられた被害者<sup>転生者</sup>である。

フリーザ（笑）（南）（四男）「……………」

ブロリー（馬鹿）（錦）（三男）「……………」

悟空（偽）（流星）（長男）「……………」

ベジータ（BINGO☆）（恒星）（次男）「……………」

そんな四人はそのそと穴から出てくる。さながら墓から蘇るアンデッドだ。ドラゴンボールの世界観のかけらも無い。

流星（悟空）「…………いや、うん。ドラゴンボールキャラがこんなことで死ぬわけないもんな……………」

恒星（ベジータ）「…………何故あんなに焦っていたのか分からない……………」

錦（ブロリー）「やだ…………めっちゃ恥ずかしい……………」

南（フリーザ）「顔芸の帝王……………」

「「やめろ!!」」

3人が同時にフリーザ（四男）の言ったことを否定した。もうこれ以上何か言うところの姿を貰った意味も無くなりそうだった。

少しだけ沈黙が続き……ハア……と同時に全員息を吐いた。

ドラゴンボールファンとしてこれは非常に不名誉な事だ。

なんで『そうだ！飛べばいいんだ！』と、思わなかったんだろうか、舞空術を使つて飛んでいれば地面に激突することも無かつたし、こんな醜態を晒す必要もなかつた。

穴があつたら入りたいとはこの事だろう。まあ、正直しようもないちつぽけなプライドによる羞恥心なので、そこまでする必要はない。

「取り敢えず……ここは幻想郷つて事で良いんだよね？」

「まあ、空を落ちてる最中に飛んでる人型の影もいくつか見かけたし……見渡す限り人里なんてなくて、殆ど山や森しかなかったからな。今の日本にそこまで都市開発が進んでいない土地なんてないだろうし、ここが幻想郷つて事で合つてるとは思う」

「なんかパツとしないな。パツと……」

「……異世界転生直後がこれつて中々来るものがあるな……」

ハア………

4人はもう一度大きなため息を吐いた。若い男子ながら異世界転生というものに憧れたりするのだが、こんな始まり方は要望していなかつた。というか、ドラゴンボール

キャラさながら平然と舞空術で飛んで摩訶不思議大冒険を繰り広げたかった。

そんな事を胸にしまいつつ、彼らはこれからどうするのか決める事にした。

「まず、長男の俺から言えば…女の子とイチャイチャすればいいと思う」

「クズがあ…」

「やめて!?!その顔と声で『クズがあ』とか言わないで!?!怖いから!」

「…長男が凄いい情けない……つうか悟空の容姿と声してんにそんな醜態を晒すな」

「殺しますよ」

「ヒッ!?!」

実に情けない、もらった力は宇宙最強と言われても過言では無い力と体を手に入れたのに、余りにも精神が軟弱だ。ドラゴンボールファンとしても、本来のキャラクタ―としてもとんでもない醜態を晒している。だから、駄目長男（悟空）を『一度メようかな』なんて兄弟が思うのは仕方のない事なのだ。

「カカロット! 貴様それでも誇り高き戦闘民族かあー!!」

ここで、次男が長男をさらに虐めてやろうと、本物と遜色のない迫力で激励とも文句とも捉えられる言葉を叫ぶ。

「お前までそうする!?!キャラになりきるのお前ら!?!」

「一度頂いたチャンスをそう簡単に手放すわけがないでしょう?」

「もう、空気を読め。俺たちらしさを残したまんまキャラになり切ろうぜ？せつかくの異世界転生なんだしよ」

三男、もといブローリーが本来の口調で悟空、もとい長男出来損ないに言葉を放った。

「……そうすつか。せつかくの異世界転生だもんなあ！」

「だが、俺たちがこれから何をするかは決まったわけではない」

「フム……。ペジータさんの言う通り。まず何をするか……から決めましょう。ま、もう決まってる様なもんですが」

「血祭りか？」

「馬鹿じゃないの!?!……んっ!……すまねえ。フリーザがする事って、食いもん探すって事だろ？」

「ええ。なんせ此処には大食らいの猿どもが3匹も居るんですからねえ……」

「なに？」

「おや。すいません。つい本音が」

「ほう……。貴様、余程地獄に返されたいらしいな」

「ちよ、ちよつと落ち着けよ! 2人とも! 別に喧嘩する必要なんてねえじゃあねえか」



三男（ブロリー）は悔やんだ。劇場版限定キャラであり、一番のお気に入り、キララとはいえ、片方はマジで悪魔な破壊の申し子クレイジーサイヤ人で、もう片方はピュアピュアめっちゃめっちゃ良い子のサイヤ人の所為で、自分の本来のキャラと合っていない、話す機会がなくなってる事に気づいたのだ。

そして、此処までの一連を完成させた、悟空（長男）、ペジータ（次男）、フリーザ（四男）はハイタッチしてブロリーに向けて渾身のドヤ顔を向けてたりする。その後、辺りに3回デデン☆という、音が響いたとか響かなかったとか。

その後は色々と氷の妖精やその他の愉快な仲間たちと一緒に軽い弾幕バトル繰り広げてたり、無事に食料を集め終わって仲良く魚だったり果物を食べてる姿が河川の近くで目撃された。因みに、見たのは前回何処にいるかも紹介されなかった九条雷牙くじようらいかである。

その後、3人の屈強な男たちと、ロリータ4人、美少女1人、宇宙の帝王1人が仲良く魚焼いて食ってるという構図が完成した。

## 博麗神社に駆り出された奴の場合

桜が立ち並ぶ神社の境内というのは今の時代を生きる若い者たちからしても『とても綺麗だ』と言える。捻くれたものはそんな事言わないのかもしれないが……まあ、今はその事についてとやかく言う気は起きないので、この話題は放置しておく。

この神社には人気がなかった。

いや、神社の中に1人いるのはなんか感じ取れるし予想はついているのだが、本当に人気が無い。

この場所が日本に知らされたらどれ程の人間が来るだろうか……。きつとこの人気のなさなんて消え去るだろう。一部の貧乏巫女ファンの人は所持金全部賽銭箱に入れるかもしれない…。

あの急に自分を呼び出した全神王とか名乗っている幼稚な名前の神には多少の礼はあるが、やはりこ急展開には意識というか……頭がついていけない。なんせ急に家族や友人と永遠に会えなくなってしまうのだから、落ち着く余裕なんてない。

……筈なのだが。

なんでか今は心が気持ち悪いくらい落ち着いている。

この桜舞う幻想的な景色を眺めたからだろうか？……それとも自分が狂ってしまったのだろうか。

それともあの神が俺に精神干渉して操って来たのだろうか？

真偽は確かめもない様な事なので一度冷静になった頭でこれからの事を考える。

幻想郷に来る前にあの馬神バカミに出会い：《ゴールド・エキスペリエンス E ・レクイエム》の能力を貰った。

簡単に行つてしまえばチート転生だ。

《ゴールド・エキスペリエンス E ・レクイエム》とは別に《ゴールド・エキスペリエンス》の能力もちゃんとあり、使い分けができる。

まあ、能力を貰っただけで使い方は分かるが、使いこなしてはいない。早々にうかうかしていられないだろう。ここでは一応弱肉強食の世界、しかもあの神は他にも似たようなやつをここに送つたと言つた。

……ジョジョという枠組みに置いて最強と謳われるこの能力だが、実際そんな奴ら相手に生きていけるかは分からない。ドラゴンボールみたいな身体能力が馬鹿みたいに高いやつだっているだろう。そんな奴らが来た場合、本体はクソ雑魚な俺はあっさりとやられる。

まあ、元々『人』であるのでそんな殺人が好きで更に快樂主義とか典型的な犯罪者が来るとは思えないが、それでも同じ力を貰っただけの存在……使いこなしてはいないだろう。俺だけ使いこなしていないという可能性もあるが……流石にあの神の性格からそういうのは無いだろう。多分アイツは人が苦しんでるのを見て笑って煽るタイプだ。(合ってる)

しかし、とは言つても自分はそんな面倒ごとに首を突っ込むのは無駄に思っているのであまり関わり合いたく無いというのが本音だ。出来ればただ普通に東方キャラ達と戯れていきたい……人里で会つて世間話をするだけでいい人生の刺激になる。吉良吉影みたく植物のような感情の起伏があまり無い生活というのは言い過ぎだが……まあ平穩には暮らしたい。

矛盾しているな。と自分でも思う。

平穩な暮らしをしたいのに、わざわざチート転生者達が関わつてきそうな東方キャラと世間話をするような間柄になりたいなんて……。

そもそも転生自体を拒否すればいいのだが、あの神の場合絶対に『だが断る』とか言  
いそうだ。

つまり死んでしまった時点で俺に平穩な暮らしは未来永劫無いのだ。

この東方 project と謳われる世界には自分を含めて不純物質が大量に混じったせいでどんどん崩壊していくだろう……主に通常の生活とか……パワーバランスとか、流石に転生者達も自分の推しキャラが住んでいる世界を壊したいとは思わないだろうなので博麗大結界の崩壊とか幻想郷の崩壊とかも無いと思う……。

多分。

まあ、最後に賽銭でも入れて平穩でも願って置くか。幻想郷で使用している金銭は今の時代の俺たちと同じものかどうかは知らないが二次創作では大体日本円だったし、多分……きつと……おそらくは……大丈夫だろう。

チャリン。

カラカラカラカラ。

パンツパンツ！

ドタドタドタドタ！！

二礼二拍手を終えたところで最後にもう一礼……というところでなんか物凄い勢いで走ってくる音がする……。明らかに神社の中から、予想はつく。一体誰なのかも、どうしてここまで大急ぎで来てるのかも……。

「シャア!!今日の夕ご飯の材料ゲットオオオ!!」

賽銭箱から信じられない速度で500円玉を抜き出し、脇をこれでもかど主張している巫女服を着た美少女が何やら雄叫びを上げながら金を握った手を掲げた。

……材料をかうお金じゃないのか？まさか、食わないよな？

お願いだ食わないと言ってくれ。

## 狂ったやつの場合

「ンツン♪実に清々しい気分だあ！歌でも一つ歌いたい程にイイ気分だあ！随分前にこんな体になっちまってからかかってないほどまでにいい気分だあ！こんな気分のいい日なんてこれからあんのかなあ！」

「……歌うなよ。マジで。……吐くぞ……何処が気分いいんだか……」

「クケケ！急に辛辣じゃあないかあ……。どうしたんだい？」

「…………いや、お前なあ……。あの上司全神王のお陰で『上と下』『右と左』『天と地』『重力と

無重力』の境界弄られたせいで……もう俺はこの感覚に慣れたが吐きそうなんだよ……俺に少しの衝撃も与えんなよ……つか誰がお前の身体持つてやってると思ってるやがる……」

「それに関しちゃあ感謝してるぜイ？まあ、私もこんな気持ち悪い状態になんの初めてだから許しておくれよ！」

「歌が歌いたくなる程気持ちのいい日じゃなかったのか？」

「おいおい、もう何秒前の話してるんだよ。一教科のテストが終わった中学生じゃあるまい。今を生きようぜ？」

「…………今日はジョジョネタ日和か……ん？」

「タンクローリーだ!!」

意外! (でも無かったけど) 担がれていた筈のクトがいつのまにか宙に浮きタンクローリーを掲げルミアにおもいつきし叩きつけた!!

「消滅」

しかし、それは瞬時に『消滅』!! なんとというギャグ潰しだ!! (タンクローリーで人を圧死、もとい焼死させる事をギャグで済まされることに何も疑問を抱かないルミアはもう駄目なのかもしれない……)

「あり? 消えちゃまった」

「全てを司るルミアさんを舐めんよ。……ついでに聞くが何でロードローラーじゃないんだ……」

「全てを司るってんならあの全神王にかけられた境界を外せんじゃねえの?」

「(無視かよ) お前だって狂わせればいけるだろ。……アイツはチートなんてちやちなもんじゃねえんだ。はつきり言つてアイツのデバフは消せない……アイツの任意で消すか、予め決められた時間が経つのを待つしかない……」

「クケケケ! もう何十回も試してんに油污れみたいにシツコイんだよな! ウザったら



しいったらありやしねえ！」

「それに関しては同意だ」

「んーにしても絵面がなあー。私もうちよいでパンツ見られそーなのが何かなー気に入らん」

現在のクトの態勢はルミアに両足を肩に担がれてる状態で、まるで原始人が石やらなんやらを使って魚を気絶させて、そのまま自分の集落に運んでいる最中みたいな格好になっっているのだ。

因みに片方男だがどちらともスカートなので、ルミアがスカートと足を一緒に掴んでいるので垂れ下がったりはしないが少しでも手の位置がズレたら特に意味もないサービスシーン空間が生まれるという全く意味のない状況になっている。

「お前にそんな乙女的思考があったのか」

「喧嘩売ってるなら買うぞ？お？お？」

「いや売らねえよ」

「買えよ！そこは！どうせこの小説を見てる奴らは私たちがみたいなチートオリ主が暴れるのを期待してんだから!!」

「お前までそつち側行つたらそろそろマジでツッコミ役いなくなるぞで」

「知らんっ!!」

「……まあ、アイツらを相手取るとなると気持ちには分からんでもねえが……」  
 「ていうか！今どこ向かって歩いてってんのよ？」

（話切り替わんの早えな）……博麗神社」

「んで、ここどこよ？さつきからなーんも見えないんですけどお？」

「……知らね」

「ハアツ☆？」

「なんだよその『はあ？』は、愉快なのか不愉快なのかはつきりしろ」

「不愉快に決まってるんだルルオ？なんで知らない場所から博麗神社に行こうとしてんだよアンター！」

「仕方ねえだろ。今視界も奪われてっから何も見えないんだよ。視覚を操って三人称視点で周りを見てみたけど本当に真っ暗なんだよ周りが」

「だからってあの超めんどくさい向日葵畑のお嬢様に出会ったらどうなるか考えてみるよ!!このよくわかんない空間が紅魔館ならまだしも適当な所に繋がっていたら私迷子だからな！ゆかりんに言いつけてやるからな!!つかなんでアンタは視界奪われてんだ」

「アイツ全神王の気分だろ。どうすることもできねえよ」

「お前もうちよい神っぽいことしてみるヨオ！元常闇妖怪のお兄様ヨオ！」

「元じやねえ！現在進行形でルミアのお兄様だ！」

「そこは食いつくのね」

「……急に冷めんなよ」

「ハア……もうシーランペツたんゴーリラ私のお胸はボインボイン」

「下手な下ネタやめろ。それとお前胸ねえだろ」

「キヤー！セクハラしてきたわこの神様アー！」

「いや、酸素と炭素と水素とかで身体ができている連中に興味はねえよ」

「人を物質に例えんなよ！しかも！私そんな物質で出来てないんですけどお！一緒にし

ないでもらえマスウ？」

「そういえばお前って神器だったな。………壊れた」

「クケケ！やつと思ひ出したか権八郎！」

「俺はルミアだ」

「知ってるよ？何いってんの？」

（急にウザくなるのな）



「え？ここで場面切り替わる？」

「いやまあ、確かにあの後は特に何も喋らなかつたが……かといつて進捗があるところまで動画編集みたいにかットするか？」

「私はもうこの作者には何もツツコまないと鋼の意思を抱いたぜ……つか待てい！私が期待していた面白いことがまだなーんも起こってないんですけどおっ？」

「知らんがな」

作者に対しての愚痴を混ぜながら二人は出口らしき白い光を放つ方へと歩いて行つた……まあ、まだクトが担がれている状態なので実質一人しか歩いていない。

やっと出口らしきものをでてみればあたり一面の緑と赤い帽子被つてたおっさんが好きそうなキノコがノコノコと生えている見知つた森にたどり着いた。しかもどつかの誰かの家の前だつた。魔法の森で住んでいる奴らは限られており、その中で家を構えている奴らとなると広くもあるようで狭い幻想郷では御馴染みのあの二人しか思いつ

かなかった。あの主人公とパートナーの方との家とは思いたくはなかった。散らかってそうだし。

当ての博麗神社は外したが、まあ魔法使いの場所でもいいだろうと2人は歩を進ませた。

ルミアは未だに不安定な五感から気を紛らわしたくて…クトはお人形遊び？がしたくて…。

因みに、二人の五感はまだに狂っている状態であり、重力も感じ取れていなければどちらが左か上か、右か左かも感知できない状態でマトモに戦えるような状態ではない。

しかし、しかしだ。

これは『低次元ギャグコメディ小説』…ほんの少しの戦闘を乗せて…だ。

ただただ真つ黒な空間歩き回ってる姿だけ幼女の2人の会話を見せられたって面白いわけがない。

そして、ここで忘れてはならない要素はある。

これはコラボしている小説だ。

そして、魔法の森で暮らしている人は1人増えている。

加えて、そこに居る人物の近くにも異世界からの介入者は近づいてきている。

つまりはだ。

「え」

「お」

「……」

「へえ……」

出会っても仕方ないよね。

## 迢ゆ▲縫湓d縫、縫ヨ蛸工蛸 2

温かみのある光が頬を撫でた。

しかし、そんな暖かみなんてじっくり感じる暇もなく光は過ぎ去っていった。

光速に似たような速度で発射される光から人<sup>グ</sup>を担いだまま躲していくと言うのはなかなか味わえない弾幕ゲームだ。

思わずアイツと戦っているようで口の端が不思議と上がった。

さしても、この戦いは何が原因だったか。クトのバズーカから始まったのか。

もう忘れてしまったよ。相手の躲すだけなら簡単だ。『当たる』『躲す』『発射する』される』その他の概念を司ってしまえば相手がどんなに能力の補正をかけて正確に当てようとしたって当たりはしなかった。というか何かを発射する事なんて相手には出来ない。

光が止んだ。

目の前の男はこちらを敵とみなしたのか容赦がない、淡々と俺たちの事を攻撃し続けている。

隣に居る女は特に気にもしないで男の横でこちらの様子を伺っていた。

んん……未だに視界がぐにやんとしているし音も壊れたテレビのように聞こえない。正直さっきの暖かな光だつて『暖かい』ではなく、本来なら『熱い』のだろう。

恐らくは太陽のコロナと同等の熱気。当たっても当たらなくても周囲の物質が次々に溶けてる。一体ここは今何℃なんだろうな。こここの家の主人は可哀想だ。

それに今は上も下も分かかっていない実際に今俺は立っているのか浮いているのかさえ分からない……。

正直床に色々な物をぶちまけたい最悪な気分だ。

それ程までの不環境だが……：前話でも言った通り『もう慣れた』。

こちらは相手から避けることしかしていないが、まだ余裕はある。

相手も随分と余裕のようだ。

目を瞑っている方が戦いやすいと強者ムーブをかますのは仕方ないと思う。

決して煽りではないが、視界に捉えるより三人称視点に切り替えた方が視界は良くなる。

相手はかめはめ波（仮称）を撃てなくなったことに特に首をかしげるもなく次の一手へと移った。

クトが何を言っているのか、感覚でしか分からないが今は『あぶなっ!!』とか『もうちよつと安全運転で動けよ!じゃないと《地面を歩いていい権利》剥奪な!』とか言っ



てるんだらうか。

まあ、何言つてようが謝る気は一切起きな……

瞬間…地が爆ぜた。

金髪<sup>ルミア</sup>が倒れた。あの爆発を全て受けたらしい。

担<sup>ダツ</sup>がれてた奴は無傷<sup>ト</sup>だった。

どうやら担<sup>ル</sup>いでいた奴を踏み台兼盾代わりにした様だ。

「クツケケケケケケケケケケ！予想していたのと状況ちげえけどまあいいや！さてさアて…最  
& a m p ;強！で最つ狂などんでん返しを始めてやるぜ！弾幕ゲームから処刑<sup>デス</sup>ゲームに  
切り替わりまーす！」

先ほどの地爆の様にもう一度ここら周辺を地爆しようとしたが、上手く機能しない。  
先ほどからこんなことばかりだ。

まあ、無意味だが。

「あり？狂わせたのに狂わせて戻しちやったん？あらやだあ…強引ね！これだから最近の若い子は…だったら私たちのデバフも解いてほしいわあ……てか解けやあー！！  
模倣『ブローリー』！からのPODプラスターアア！！」

球形の物が潰れて原型を無くした物体が飛んでくる……光速よりも速いが避けられ……？

「フハハ！貴様はデスループという名のクトちゃん料理クッキングの輪に嵌ったのだアア！！見せてやろう！技力無限のギガンティックスラム（ドラゴンズボールゼノバース ネット対戦での）害悪嵌めにな！！」

顔を掴まれそこから何か手にエネルギーを溜めて爆発した。

久々に感じる痛みだ…と起き上がってもタイミングよく頭を掴まれ爆発した。

立ち上がり、掴まれ、爆発。

立ち上がり、掴まれ、爆発。

立ち上がり、掴まれ、爆発。

立ち上がり、掴まれ、爆発。

立ち上がり、掴まれ、爆発。

これを見る限りは圧倒的な蹂躪にしか見えないだろう。まさに処刑<sup>デス</sup>ゲームと称されてもおかしくは無い。しかし、相手がどんどん死に近づいているかという点、それはN Oになる。

自分は一定の行動しかできない様にプログラミングされた様だ。

これが相手の能力だとしたら…なんて事のない相手だと思った。

「うーん…。流石のクトちゃんもここまでやるのは初めて。こんなことやったら相手が可哀想だなあ…なんて思うと思ったか馬鹿め！」

今までと違い、大きく投げ出された。

「乙女的にはアレだけど、アンタみたいな人外相手すんのにや恥も捨てなければ生きれない!! そう! それが不意打ちのギガンティックスロアア!! 正直口からとんでもエネルギー波出すだけなんだけど、強いんだわこれが」

莫大なエネルギーの波に飲み込まれた様だ。

フム…: フィジカルでは完全に負けだ。能力が無かったら死んでるだろうな…: 普通だったのなら。

「ふいー…いい汗かきましたー！つつても、まだまだ生き生きとしている様ですけど。まったく、いつまで眠ってんのかね??ルミア君ヨオ！私一人じゃ荷が重いんですがあ？」

「アア！楽しいね！戦闘狂じゃないけれど楽しいことはやっぱり楽しめるもんだ！」

「クツケケケケ！おお！ルミアよ！たった一発の攻撃でノックダウンするとは情けない！つかアンタ、前にあの目の前の巫山戯た奴みたいの世界何個も壊す様な攻撃してたじゃん！アレどしたのよ？そんなに紙装甲でしたっけねえ？」

「人を心の中で煽るのをやめろ。まあ、お前が俺を立て代わりにしてくれたお陰で俺は気絶するふりができたよ。ありがとな」

「あんれー？いつの間にアンタってDMになったん？」

「DMじゃねえよ。どちらかつうならSだぞ俺は」

「またまたー！」

「相変わらず飄々としているこいつを好きにはなれない。まあ嫌いでもないが。」

「にしても、とんだ大物もいたもんだな。ドラゴンボールで単体のみなら破壊神や天使除いて最強の新ブローリーの攻撃をまともに受けてピンピンしてるのか、銀河を消せる単位の攻撃じゃねえとダメか？」

「お前たちは何故勝てない相手に戦いを挑んだんだ？」

「クツケケケケ！勝てる勝てないって関係なくない？面白ければいいのさ！」

「馬鹿野郎。圧倒的格上に喧嘩売って死んでたら元も子もねえだろ。お前は不死って訳じゃねえんだぞ」

「あらー！ルミア君私のこと気遣ってくれてるのぉー？これってもしかして恋!?!でもごめんなさい…男の娘はちよつと……」

「誰が男の娘だ」

「会話を乱してくるタイプか……面倒だな」

「いやだ…アタシそんな乱れてないわ！まだ私は純潔を守っていますわよ！」

「誰もそんなこと聞いてねえから」

「まあ、語る価値も、もう無いか」

「おっと、ここからは幻想郷の博麗大結界の安全を準拠して最小限までの戦闘を行わせて貰うからな？」

「刹那の内に多重高次元結界がルミアと『』を囲むように敷かれた。

それはこれ以上の被害が周りに及ばない様にするルミアの調停者としての役割だった。

「おー……ここで言つときたい名言があるから言わせてもらうぜ！悪いな……ここから先は一方通行だ！」

1人おかしな事を言っているが無視でいいだろう。

「フム……成る程な……即興にしてはいい出来じゃ無いか？」

しかし、パリンとそれは壊される。ガラス細工が割れて舞うように空に結界の欠片が飛び交う中、その光景には幻想的と思える人もいるだろう。しかし、中から現れたのは腐肉を骨翼にまとわりつけた、何処かの悪魔の妹と酷似している存在と、どこぞの常闇妖怪を少しボーイッシュした存在と、イケメンだ。

あ、やっぱり幻想的に見える。

「まあ、壊されるよな」

それ自体に慌てはしない。想定していた事だ。だが、隣で『やつべ。黒歴史できちやつたよ……』なんて発言している少女に向ける余裕は無かった。

相手は久々の全能者。相手するにも互いの能力が互いに封じられ、封じる能力が封じられる、とにかく能力潰しから始まる。それははつきり言つて死合の泥沼化で、面白い

もなんとも無い。

ルミアは戦闘狂の節がある。別にサイヤ人みたいな細胞はない、悠久を生きた者の唯一の娯楽と言った方が正しい。だから、そんなつまらない戦いにするくらいなら、楽しめた方がいいだろう。

今回はあの男以来の全能者同士のバトルである。本気を出してみたいところだが……自分は幻想郷そのものだ。例え世界が変わろうと自分が愛した世界に変わりはない。だから死ねない。

故に、ルミアは本気を出せない。

再び地形は破壊された。周りの木々は陥没し、地形は段々と渓谷の様に割れてきた。もう魔法の森はあと何分原型を整えてられるのか……クトは特にそんなことも気にせず、現在ルミアと戦っている男の付き添いと思われる女性に話しかけていた。

「Hey彼女！私と一緒にクトゥルフTRPGやろうぜ！」

「断るわ」

「oh…！F\*\*K！」

「貴方にそこまで言われる必要はないと思うのだけれど」

返ってきたのは、ド正論だった。

◆？

場面は切り替わる。

ルミアの眼前には正に天変地異が起こっている。そもそも自分が今乗っているの地面なのは間違いないが、眼前に広がる木々が生い茂っている場所も地面なのだ。

地が宙に浮き足場になる。それは全能者同士にとっては当たり前のような光景だ。バトル漫画で神vs神と言われても刺し違えないぐらいには画は出来揃っていた。

その事に関していちいち驚く事なく周囲を見渡す。

相手は未だに本気を出していない。

己もそうだが…『龍神化』はもうしてしまった。余力が相手よりあるとは言えない。



踏み込み……からの瞬時の最高速度。

地面が壊れ、その宙に浮いていた地面は壊れる。

『願い』の力で願った事を実現する能力で、アイツの四肢が斬れる様に願ったが切れなかった。

そのかわり、余波で奴が空中で止まっていた後ろの地面は全て切れた。空間も咲いてしまつて亜空間が開いてしまつている。

小の剣で相手を切つてみたが原子サイズにもならなかった。

細胞を壊死させる様弄つてみた。これは少し手応えがあつたが、自分に鍵を差し込んだと思つたら直しちまいやがった。

急にバイオリンを弾き始めたと思つたら。俺と同じ『龍神化』の様なバフ系統のものだった様だ。音を聞いて死ぬみたいだな単純なカラクリじゃない様で少し面倒くさく思つた。

相手からの瞬間移動からの殴りに対し、自分も殴る。

ステゴロつて訳じゃないだろうが、こちらら幻想郷の生命を司つてるもんだ。

『破壊』『奪取』『返却』の概念を司り、相手から破壊力を奪い、それを相手に返した。つまり、俺はコイツを殴つた。しかし、コイツは自分から自分を殴つたのだ。

よくある反転とかではない。奪つてから返す。一工程加えるだけでも相手は能力の

無力化は出来なかった様だ。単なる反転と思ったのか。

思った事を実行するという能力も先入観に囚われれば扱いやすいものだ。

しかし、相手は特に動じていなかった。

まあ、そうか。お互い、痛み概念はとうに無くしたし、再生という概念は未だ健在だ。

痛くない攻撃が怖い訳ないだろう。それに自分の肉体は勝手に再生される。コンマの世界で肉体が修復し続けるのだ。この戦いに終わりがあるのか少し気の遠くなってきた。

それでも刀を構えて奴に立ち向かった。

斬る、弾かれる、斬った、打ち合い、火花が散る。

それを、何度も繰り返した。

切りつけても互いに直ぐに修復されたものに様に肉体は滅ばない。

いくらかの刀の打ち合いをして突然妙案が思いついた。

『思う』という概念を無くしたのだ。

同時に。俺も『思う』の概念を無くしたせいで能力を使えない。

最初からこうすれば良かったとしみじみ思った。

お互いの、心の声は思われなくなった事により聞こえなくなった。

「だから、口に出さなきゃいけないなくなったな」

「ほう……面白いな。これも君の力か。実に面白いよ」

「楽しそうだな」

「ああ、楽しいと思っちゃった……いや、口に出してしまっただけか」

「思うことが実行できるというお前の能力以外にも能力があんだろ？出してみろよ。俺がそれを殺る」

「俺の全てを壊したいのか？不可能だよ」

「不可能という概念が反転する世界なんて面白いと思わないか？」

「ほう……ああ、実に面白いね。君は」

「ああ、面白い奴だぜ？俺は」

互いに本気を出し始めた。

そう、ルミアは感じた。

お互いに踏み込み地面は壊れ、世界を覆い尽くす様な閃光が当たりを包む。

雷の様なもの同士がぶつかり合い、爆ぜてはぶつかる。

雷の様に光だけが先走って音だけが遅れた。

互いに光速の領域などとうに過ぎていた。

彼らを視認することは、転生者：はたまた来訪者の中でもごく少数だった。

お互いが空中で殴り殴られ蹴り蹴られ切り切り切られる度に地上にはその余波が訪れる。もう地上はラグナロクでも起きている様だった。

◇

「これはこれは……また面白い世界にたどり着いたようだ」

1人の女性？が地面からウネウネとスライムみたく湧き上がっていた。周りの木々はへし折れ、辺りの大地は干からびた大地の様に割れている。その中心に女性は立っていた。

肌の色は土色と言わずまんまの肌色。明らかに形状は人間では無いが彼女は人間……ではなかったな。

彼女の種族名はエルーンと言う。

幻想郷とは違う世界からやってきた蒼の異世界という世界での代表的な人種族……

ケモミミ生えた人と思ってくれればいい。

彼女は全神王に連れ去られてきた被害者では無い。勝手にこの世界に溶け合っ  
渡って来た存在である。

この世界は異様に小さかった。宇宙は存在していた。しかし、地球の様な物しか無  
かった。地上は果てしなく広い様でとても小さい……この世界の壁に行ってみたもの  
の随分と強固な境界を貼られている様だ。

まるで箱の中の世界だな……と思った。この地上が箱だとしたら宇宙は箱を開けた外  
の世界だ。

この様な形状の世界は初めてで、何かしらの能力者がいるという事は確定だろう。

この世界は面白そうだ……。

そう思っていた矢先、膨大なエネルギーを放っている存在を感知した。

自身が新たな世界に存在を認識されるには時間がかかるはずなのだが、力の余波が原  
因か、はたまたこの世界がそういう存在を受け入れ易いのか。もう私には魂を入れられ  
る程の器が不完全ながら出来始めた。これには少し驚いたよ。

体が完全に出来上がったら是非ともこの莫大なエネルギーの出所とこの世界につい  
て調べてみたいものだ。

……と、言いつつも、そのエネルギーの波のせいでこの世界が壊れつつあるのも事実だ。

この謎のエネルギーに出会えた事を喜ぶべきか……はたまた世界が終わる寸前に来てしまった事を呪うべきか。

まあ、世界はいくつもあるのだ。

また融け込んで、乖離を繰り返せば似たような世界に巡り会えるだろう。

流石に今まで感じたことのないこのエネルギーに出会えるかどうかは分からないが……。

しかしまあ、一介の研究者としてこのエネルギーが最終的にどうなるのかは見たくなるものだ。

そう思い、この世界がどうなって行くか見ることにした。

◇

まだ、ルミアは立っていた。

はつきり行っておくと、死んだまま立っている。

しかし、『生と死』の概念を曖昧にしたからか、死んでいるとは言い切れないし、生き

ているとも言えない。しかし肉体は本人の意思……というより精神で保っていた。意思は働いていない。自身でその概念を壊してしまい。思ったまま動けなくなってしまうのだ。

しかし、それは相手も同じである。『回復』『修復』『改悪』『改良』『代謝』他にも色々壊した概念があるが……互いに再生できない体には見るに耐えない傷が無数に印付けられている。

「君とは、本当に、面白かったよ」

しかし、それでも尚相手は動けた。

「君は魂と精神、肉体。全てを壊しても生きていたね。何度も。何度も。私が出会って来た存在の中にそんな存在は居なかったよ。例え最高神だろうが、私の前では土下座して戦うのを拒んでいたよ。こうなると分かっていたから。……あの全神王とかいう神？は土下座どころか勝手に呼び出して勝手に転送させられたが……まあ、いつかは潰す。未だにあの時の怒りは拭えてないからね」

「そうかよ」

「おっと。話せたのかい？」

「ああ……今な。……この世に死という概念を無くしたからな。今は誰もが真の不老不死だぜ。誰もが最悪に不幸な未来が待つてる世界にしちまった大罪人のルミアさんに何

か言うこととはあるかい？」

「特にないな。もう終わるのだし」

「おいおい。聞いてなかったのかよ。死とか消滅とか、もうそんなの効きやしねえぞ。即死なんていう能力も死という概念がなくなっちゃった今、その能力自体が失われたんだ。お互いに」

「ウチにはそんな世界の改変を完全に無効化する娘がいてな」

「…もう『思う』概念が普及してやがるな………思考して発動する型ではなく、自然とそうなる型か。俺もそうなるよう再設定しておくか」

「ははは…と乾いた笑みを零すルミアという青年に私は最後の決裁を行おうと手をかざした。

「敵対した者には容赦ないのが私だ。だが、一つの礼として、遺言を聞いてあげよう」

「随分と上から目線の物言いだな。つうかー容赦ないんだったら、最初っから話しながらバトルすんなよ」

「それが遺言かい？」

「…いいや……あ、そうだな。最後に一言言いたい」

「なんだい？」





『  
E  
X  
化  
』

狂ってたやつの場合・繚?▲繚ア繚匱クサ莠匱?繚繚  
 励> 莠九繚ヨ繚

何が起きた?

たった0.1秒前の事だ。

『<sup>エキストラ</sup>EX化』という単語を聞いたのを脳で確認すると同時に私は奴の存在を消した筈だ。

だが、事実は奴が消えたことではなく、私が一瞬のみ死んだという事だけだ。

一瞬死んだという表現もおかしいが、私はそういう存在なのだからという説明しか浮かばない。

周りの状況を確認してみる。

いや、周りは静かだったこの世界の名に相応しい程美しい景色が広がっている。

空はもう青色を奏でていなかった。代わりに赤という新たな旋律を奏で始めていたようだ。

それがより、紅葉やイチヨウ、万緑の命を引き立てていた。……この世界の植物は不思議なものだな。秋に咲く物と夏に咲くものが混合されている。

どちらも衰えていなく、互いが互いを引き立たせているようだ。

景色の美しさに浸るなどらしくないな……まだ頭がチカチカする。

私を以つても現在の状況が把握できない……。

……もう一度、目を動かしてみる。

胴、腰、脚の順に体を確認すると、胴の部分に大穴が開いていた。殴られた様だ。

腰を見るが。無い。

あるのは胴からはみ出ている背骨と内臓のみだ。

脚は……大分離れたところでちぎれた様だ。

腰より先の部分は地面が抉れている道が続く。

自分は地面を削りながらここへ来たようだ。

頭を動かそうと違和感を持った。視線のみを動かして全く気づかなかったが、どうやら頭はギリギリを保っているだけで僅かな皮と骨で繋いでいる様だった。

更に視線を移し、肩を見てみるが……肩より先は何も見えない。ただ黄土色と茶色を綺麗に混ぜた様な地面が広がるだけだ。

その地面もだんだんと紅く染まっていつているが……。

どうやら胴と身体を泣き別れられてしまった様だ。

コヒュー……コヒュー……と喉から空気が漏れ出る音が続く、その間にも血は止めどなく溢れるが、どうするという気は起きない。

しばらくは、その空気の合間を縫うような音が鳴り響いていた。

…ふと、何かを感じた……。

凄まじいスピードでナニカが近づいてくる……と、思う直前。

「こんにちは」

目の前は闇に覆われ何も見えなくなった。

その中では唯一何か……妖しく……艶めかしいナニカ線状のようなものが煌めき、紅い瞳が私を射抜いている。

初めての感覚であった。まるで私がそれを求めていたかの様に、それが私を求めているかの様に……呑み込まれて……

「さようなら」

グシヤア

男の顔は真つ赤に広がった。

◇

全てを司る能力＋森羅万象を呑み込む能力

それがマジになった時の俺の能力。

全てを司る程度の能力から程度という壁を無くし、森羅万象を呑み込む能力をプラスした……まあ、単純な強化状態だと思ってくれればいい。単純な……とは言い難いか。

EXなんて何千年ぶりだろうな？

初めてあの上司全神王と出会った時以来か？

まあ、この状態になってもこれっぽっちも勝てるビジョンが浮かばなかったが…。

思い出したくも無いな。

「そろそろか…」

「今しがた肉体を完全に滅ぼした奴が起き上がってきた。完全に精神も肉体も核も再生している。」

「よう」

気さくに声を掛けてみる。

「ああ…殺されたか…」

「殺されんのは初めてか？」

「…いや、先程の一発でもう既に死んでいたさ」

「俺がくる頃には蘇ってきてきただろ」

「私は私という『存在』だからな。『命ある存在』ではない。何度でも蘇るさ」

「壊すのにも一苦勞だったぜ」

「そうかい。嬉しいよ」

「……やるか?」

「……いや、もういい。君達が私に対して敵対したのは事実だが、私は敗北した」

「よく言うぜ。俺がこの状態になる前にやあ、俺をフルボッコしてた癖によ」

「それならば、君の勝利か?引き分けか?」

「いや、この勝負って結局クトの野郎が始めたわけで、その尻拭いをしたのが俺だから結

果的に勝敗の善し悪しも無いと思うぞ」

「そうか」

「……あれ、待って……結局諸悪の根源がクトになるわけで俺たちの戦いの意味は全く無いわけだから……」

「ねえ?」

不意に声を掛けられた。

あ、あんれー?よく聞いた声があるぞー?なんか殺気もチラホラとすつぞー?

「これは一体どういう事かしら？」

後ろを振り向けば美少女と般若を上手い具合組み合わせた美少女たちが居た。

この姿は何度も見たことがある。

俺と紫が愛したこの世界の住民達だ…。

全員端正な顔持ちをしている……。

ただ、顔は完全に全員般若だ。うん。

「逃げろ」

「え、ここで逃げる普通?!」

1人の巫女の声を聞きながら全速力で逃げ出した。

まあ、全速力なんて出したら世界の光が間に合わなくなるしなんやかんやで世界が崩壊するからしないけど、正直この姿だと絶対逃げられる気がする。

「何故私も一緒なのだ？」

「こういうのを成り行きでつて言うんだ」

「ギャグ補正などは効かないはずだが…」

「いや、これマジの逃走劇だから」



◇

あ、行っちゃった。

私を置き去りにして……いや私とフランちゃんを残してレミリアさん達は行ってしまった。

去り際に『小さい子は帰ってなさい』と言われたけどレミリアさんも小さいよね？

いや、流石に失礼だね。私紅魔館で働く身になったんだし。

うーん。

にしても衝撃的すぎないかなこの数時間。

なんか起きたら神様に転生される直前？だった様で本当に急に落とされて目覚めたら森でびっくり。

近くに目立つ真つ赤で大きな館があつたのは本当に幸いだった。

門番みたいな人居たけど寝てたから勝手に入っていいのかなあ……なんて思ったら銀

髪超美人がメイド服着てこっちに近づいてきたんだからこれまたびっくり。

そして、お嬢様がお呼びです。なんて言われたから私は更にびっくり。

中に案内されても真つ赤なこの館は見た目以上に広く感じて少し怖く思ってた。

そして、お嬢様と呼ばれた人の元へ行ったらロリでびっくり。

その後に妹さん達のフランちゃんとラルアちゃんを紹介されて、可愛いとか思ってる  
と吸血鬼だということ聞かされて更にびっくり。

私がこの世界でいう外来人って事を聞いた。やっぱりここは異世界らしい。

なんで私を呼んだのか聞いたら、私に『運命』を感知したからここへ誘いざなったらしい。

正直、背伸びしてるロリかな？なんて思ってしまった私は悪くないと思う。語調もそ  
うだけど、その後起こったことが原因かなあ。

テーブルに肘かけて頬杖ついてたら急にバランス崩して、銀髪メイドの人が淹れてく  
れた紅茶頭からぶつかかって、それをメイドさんが何処から出したか分からないカメラ  
をパシヤリとやったかと思うと、フランちゃんとラルアちゃん笑い出したんだから。尊  
厳も威厳もないよね。

その時のフランちゃんとラルアちゃんの写真はめっちゃ可愛かった。天使と小悪魔  
混ぜた様な感じの笑顔だった。最高ですネグへへ。

メイドさんが鼻血出して倒れたのを私は見た後に私も鼻血を出して(多分)死んでた。

まあ、その後、起きたら起きたでてんやわんや、幻想郷の崩壊の危機らしい。

は？

と言った私は悪くない筈だ。

なんで急に、来た世界が崩壊されなければならないんだ？

というか世界の崩壊って何？

マジでそんなことが起きるの？

という感じだ。

『貴女空は飛べる!?!』と焦った様子で言ってきたレミリア様(笑)に無理に決まってるんじゃないかと思ってたけど、私って神様転生してるからワンチャンないかな?なんて思い始めたのは束の間。マジで空飛べちゃった。

『本当に飛べたのね...』と驚きの表情で言っていたレミリア様(爆)の顔を私は忘れない。そうしてついてくや否や、みんな全速力なもんだから飛行に慣れてない私はめっちゃくちゃ苦労しました。

その後、実際に世界の終わりなんて光景見ました...何あれやばすぎでしょ...あんなのがゴロゴロしてる世界なんて嫌なんですけど...。

「アハハ。流星に私でもアレを見たのは初めてかなあ...ルミアお兄様があんなに強かつ

たなんてびつくりしちゃった」

「だよねだよね！今度一緒に遊んでもらえないかな！弾幕ごっこしたい！」

弾幕ごっこって何だろう？というか、少女達よその笑みをどうか私の方へ持ってきてくれないかな？死ぬると思うんだ。天国に…。

ああ、フララル尊い…。

「あ、ちよつと！お姉様!？」

「えー!?なんで落ちて行っちゃったの!？」

え？今お姉様って言った……？

………グフツ……。

『あー!?!』

◇

俺たちは今口をあぐりと開けている…と思う。

またキャラの顔面崩壊を起こしているけれど、元々俺たち普通の一般ピープルな訳で、強大な力を持ったという実感もないし、感じたこともない。いやまあ、惑星を楽々破壊出来るとか巨大な岩も運べるとかのフィジカル化け物なのは分かっているけど。

それでも今の様な光景には驚かずには居られない。なんだあの世界の終わりみたい

な状況。

俺たちって幻想郷に来たよね? 東方 projectの世界に来たよね?

俺たちが知っている幻想郷ってあんなのじゃないんですけど…。

? とうか、東方で男性キャラって香霖ぐらいしか思いつかないんだが、他にいたっけ?

まあ、そこは俺の記憶なのであまり期待はしないでおくとして、この世界で戦闘する場合大体の相手が難易度 Lunatic でやらなきゃいけないのは理解した。そう考えるとドラゴンボールであったのは正解だったかもしれない…。

修行しよう。まあ、本人達の体を得たからには本人の秩序を守る様にして過ごすけど。

あ、この魚うめえ。

※ドラゴンボール勢は前回に引き続き食べてます。

◇

何だったんだ、あの力は…?

転生して間もない自分でもヤバイと感じ取れるほどにあの力はヤバかった。

本当にジョジョの奇妙な冒険という範疇の力でやっていけるのだろうか？と不安は募る。

…まあ、極論を言ってしまうえば関わらなければいいんだ。

幻想郷の美少女達と会話をする事をラッキー程度に生活すれば、転生した見返りは帰ってくるだろう……しかしだ、やはり恐怖は拭えないな……。

まあ、まずはあの貧乏巫女を待とう。そうしなきゃ何をすればいいのかすら分からないからなあ。

……おお……ジョースターの血統よ……俺に星を見せてくれるのか……。

◇

何だったでしょう？あのエネルギー？

長らくあんなエネルギー感知してなかったなあ……。

にしても！全神王さんも全神王さんですよ！

私を急に攫ったと思ったたらいきなり訳の分からない説明をして：更にはどこかの森にまで送って！全くもう！

『え、そこ?』

『もつとあの力について探らないのかよ！久しぶりに噛み砕き甲斐がありそうな奴らだぞ?』

「いや噛み砕きはしませんよ」

『あれ? ハテナちゃんってそんなにバトル嫌がる子だっけ? お父さんそんな悪霊に育てた覚えはないなあ...』

「何言ってるんですかぶつ飛ばしますよ」

『自分をかい?』

「正論言わないでください」

『ゲララ。悪い悪い。しっかし、ここの世界も大分靈気に満ちてんなあ：こりや当たりを引かされたか?』

「そんな私たち武者修行の様な強者求めてましたっけ?」

『全てをねじ伏せての最強の『個』!!それが俺たちの野望だ!!』

『いや、俺たちじゃねえだろ』

『少なくとも穏健派もいる。何で悪霊なんかやってんだろ』

『シラネ』

「もう！ 煩いですよ！ 先に急ぎますから静かにしてください！」

『今www更www静wwwかwwwにwwwしwwwろwwwつwwwwww言wwwわwww  
wれwwwてwwwもwww』

『もう長い付き合いだぜ？ それがぐらい慣れようや』

「それでも！ 五月蠅いものは五月蠅いですよ!!」

まあ長い付き合いなので、主人格であるハテナは多少なりとも寛容であるが、彼女も悪霊である。仲間意識などは特に無いがそれありだとしても普通にイライラしている時に周りが意味もなく騒いでいたらムカつく。ハテナだって元々は人間の少女だったのだ。

一度頭を振って少し気を紛らわす。煩わしい自分の一部たちからの言葉を無意識のうちに聞こえないようにして近くにある生命の鼓動を感じながら歩を進ませた。

……………何か若干の相違感を作者は覚え始めた。

……………そういえば作者はこれを書いて疑問に思ったのだが、どこぞの素晴らしい世界で墮落した生活を送っている水の女神は対アンデッド or 悪魔キラーであるが、それはハテナにも入るのだろうか？



今思えばあの素晴らしい世界はお決まり展開を捨てた完全なギャグコメディハートフル?ファンタジーであるが、完全な戦闘アニメだったら難易度LUNATICの鬼畜世界だと作者は個人的に思っている……とまあ、雑談はさておいて、本編に戻ろう。

一人の女性が先ほどまで自分の家だったもの前で呆然としていた。

煌びやかな白髪を風に揺らしながら、ただただ家の前で立ち尽くしていた。

いつもの生気を纏った瞳はなく、その瞳を覗いたものが恐怖し得る程に暗澹としていた。

彼女は何気なくシヨツピングに行って、人里の人たちと多少だが触れ合って、忍術を披露していた随分と巫山戯た忍者を遠くから眺め、寺子屋で勤務している慧音と世間話に花を咲かせていただけだった。

その結果が家の全壊?

なんの冗談だ?

彼女は特段悪い事をしたわけでもないのに何故自分がこんな事を受けねばならないのか憤激した。

だが、その怒りを何処にぶつけなければいいのか分からず。一度落ち着き家の修復及び複製を始めた。

《少女建築中》

作業は1時間程で終了したが彼女はまだ怒っていた。

まず誰が犯人なのかは大体予想がついている。

彼女は少なくともこの世界では強者の部類に入る。

そんな彼女が先ほどまで自分の家近くで発生していたこの世のものとは思えない力を感じていない筈が無かった。

だから、彼女はその者たちが原因だろうという判断をするが、あの隠すことも出来ない様な絶大は力は本当に消えてしまった。

そういえば今頃慧音はどうしているだろうか、人里の民達を守ると言いそのまま何処かへ行ってしまったが…。

まあ、あの力は既に消息は絶っているのです、またあの巫女らがどうにかしてくれたのだろうか…：正直この世界の者たちの力の範疇では今回は不可能だと感じ取っていた彼女は更に疑問浮かべる。

誰が？ どうやって？

暫し思考したが答えに近そうな考えも浮かんで来ない。

少し頭痛を覚え始めた頭を忘れさせるため、お気に入りの紅茶をティーカップに注ぐ。

カチャ…と小耳の良い音を感じながらそれを口へと含む。

しん…と段々と体に広がるに暖かさと心地よさが少し眠気を誘った。

湯気が立ち込めている紅茶を眺めながら彼女はハア…と息を紡いだ。

「……今日は外来人が多いのね……紫」

数々と感じる本来無かった気配を端々から感じ、目を閉じた。